



河海抄

卷之七



目録

一 桐壺

二 糸帯木

三 乃七

四 夕夕

五 乃集

六 未彌瓦

七 以系

八 瓦宴

九 葵

十 林

十一 瓦石

十二 湯磨

十三 石

十四 乃乃

十五 乃乃

十六 瓦

十七 繪合

十八 瓦

十九 瓦

二十 瓦

二十 女

二十 女一巻ふけ巻あり

河海抄序

先源氏物語の寛弘のころふかきて藤和の末小
ひろ中よりふろり代りのもとてあまひ物とて
乃花とてあまの仲小中納言定家の巻とて
新美とていへて奥へとつけ大監物光朝の巻とて
と抄とて水原と号せりあまのふあす伏見
仙後坊のころより河内郡のた右ふとてまろ
ろそ福祿のころもけとあつそをせられ醍醐院
御位のころは梨壺の哥仙ふとてて万葉集

河海抄卷第一抄出

正六位上物執持士源惟良撰

料簡

一は物執のちり小政こわりとて西宮丸倉安和
 二年太宰権帥小丸遷せられ河内右三郎かこ
 めくしりあまこしとてまかりて思ひけき多るは
 大弁院内親王村上子
 女中女中まり上東門院へあつるる草中やゆり
 尋りてせぬ多るふら下竹丸をうれ在物執
 いらあまこしとてまかりては事とありす
 せられ石山寺石山寺小通承しては事とありす

小引りしと八月十八日の月洞水より公のす
けりしと小引りの風情をよみよみと云ふは
とて佛ありと云ふちねありの料ありと云ふ
にけて又此の書よりありといふは平の
おろしと云ふはけしは飛陸機梅のたふし
約六百巻とありと云てを納しけり今小引り
と云ふは長と云ふは左と云ふは上と云ふは
多くて周公且白居易のいふことなりと云
義相のたけりといふことなりといふことなり

其後次中書は書らして五十は折よりしてなりと
権大綱を約成し法と云ふと云ふは并に全ま
られりし法成寺入石開白奥書と加はれて云
物後世皆式部、此とのと云ふは老は筆と云ふ
ゆふ也と云ふは君臣の交り仁義の道好色の媒
提の縁よつと云ふは是とのと云ふは事なり
としは莊子の寓言よかりし事なり詞の妖
らふは此の書一部のうらふは書のと云ふは
書りてしるは式部の名とありたりと云ふは

かむせつるよ又我の世の事とてかむせつるよとて
又照宣貞信と云の母寛平法皇の皇女安喜帝の御妹也致
仕上長母、桐壺御門の一は服とわりけおしとて御お
し御者云以前の有様由しとておしとて
け物族の光源氏としりよとておしとて西宮の
小准下りしとて世の御氏左邊の御職相同れ
とてゆふおまの先達といさうしておしとて今
御流の御し通とておしとて如何とて御流
の御しとて御しとて人の御しとて御流とて
ておしとて御しとて御しとて御しとて漢
朝の書籍春秋史記とて御流とて御流とて御流
同しとて御流とて御流とて御流とて御流とて御流
とて御流とて御流とて御流とて御流とて御流とて御流
の御流とて御流とて御流とて御流とて御流とて御流
又慶御門の御流の御流とて御流とて御流とて御流
よハ御流の御流とて御流とて御流とて御流とて御流
ちとて光源氏とて御流の御流とて御流とて御流とて御流
の御流とて御流とて御流とて御流とて御流とて御流

ひて五條二條所と存りて女院勝月女の尚侍
より久末院より所の狩のそよりとありて冬
上天皇の号より漢ある大云の薔蹄本朝
より草薙皇子ふの女姫と稱するは是作四條
の初也初より重の河内ありてそのよとありて
よりいけありてよりありて下より延喜の河内より
と合也いけありて桓武一修後と相在る河内は准
し又光仁臣伴因ふとまた後代より桓武より
とありて河内親統也より桓武といふより河内帝
陽成帝多延喜の河内也より一修後より延喜
より河内代の事よりすよと河内唐妻よりいふより
小丁より千枝ののりよりありて二人未若後村より
の畫士也いふより一修後延喜生より又繪卷
より未若後とある代のより我之を吳禰平
一或いは云い河内といふは後代河内と号するより
河内といふ河内ありて小若後代河内は或いは河内
とありて是今葉之書に作者いふ或いは寛弘元年日記
河内河内の書ありてありて河内といふ河内也

初、源氏四統と書り代、集の詞、これ同、祿、源、下
一、横、り、り、り、り、成、り、り、り、り、今、世、も、仍、り、す
源、氏、約、八、八、八、八、以、校、令、又、檢、し、て、其、の、中、と、也、り、其、
二、系、中、停、房、中、冷、中、納、云、初、澄、中、坊、河、元、在、後
房、中、号、其、妻、氏 後、一、位、繁、子、中、玉、中、門、在、其、女 法、性、寺、開
中、号、尚、幼、右、中 五、系、三、位、後、成、中、系、中、納、云、定、家、中、
号、其、妻、氏 表、号、亦、也、名、和、禮、中、皆、有、異、同、控、勘、右、中、且、可、加
了、見、者、耶

一、紫、式、初、者、鷹、司、殿 後、一、位、倫、子、也 官、女、也、相、繼、而、降、下

侍、上、東、門、院、父、越、前、守、為、特、母、常、陸、介、為、後、女、也、其、祖、
先、者、因、後、元、大、臣、冬、嗣、次、内、舍、人、良、門、在、中、將、利、其、中、
納、言、兼、補、因、備、守、雅、正、為、時、也、以、云、元、遠、の、權、佐、言、孝、
嫁、し、て、大、貳、三、位、弁、房、狂、奴、也 生、す、其、初、也、正、親、町、
以、南、並、拉、西、類、今、東、少、後、向、也、以、院、上、東、門、院、
之、初、也、又、式、初、墓、中、在、之、林、院、自、毫、院、南、小、野、
墓、中、北、西、也、官、法、宣、院、日、記、に、紫、式、の、之、林、院、小、野、
乃、り、り、之、林、院、の、源、和、歌、也、乃、り、木、の、卷、小、光
源、氏、之、林、院、之、卒、卷、と、り、み、と、を、て、乃、り、

可なり式部ハ檀那贈借正の許可と蒙て天台一心
三觀の血脈よ入るりそより紫野を移居の幽園と
思しめたりと可しく故あるなり

一中在の先達の中ふけの後の公とい奇に不可諱訂
とよりハクすとい主をあるをといより奇撰
集の中ふあまといふ

續拾遺集

權中納言俊忠

ある所の處をとりくは軍ふする月け
とよりハハは秋風春ふといひははの處を
庭うかりといふはとみあといり

因集

典侍敦子納臣

わたり神も入柄も思ふといはるるこれ元
うは神の秀も智とていれりといはるる
わたりあまといひの志もふるといふ

勅古今集よ

前右近大臣

はあれまけといはるるものころめはるる
續古今集 太上天皇 仁徳天皇

神の言や採りてん橋の山流しとてく秋のうらね

小竹屋

打漁すまらぬく今まをひて多と有りさう夕歌の歌

光俊釣屋

けい釣漁のまをせに合てあけ漁りさ中河の釣

鷹目後味

の衣こし門の香くさるる人海らうとりののと此ね風

新吟遠集

山嵐漁のまをさるるまはむ村西をりし新集を漁りま

けいハケをかきしと申す新也初とらり奇新在合ま

虫の香もつらねぬわらぬ長くさるる香も在合ま

まれば現力もさるる月の釣漁とあらそを

續古今よあまよ何とてつとまのりさうつとわ

勝斗すんさすかかろく授衣物箱の君のま

原れ居の香もさるる新也香よ用らり奇と集

よあまよくひる今よ何とらりさうすと定らそく

や昔後成の六百毒判の初らり漁氏人さるる奇

らるる遠旅の事とさるる又正治の春園の地也り

かりと漁すけと漁氏とんさるるさるるまをさるる

事ふはことのせられらむを和歌の奥遠^遠るや

光源氏物語第一 桐壺

桐壺ハ^一洋京舎^二は昔月^三たふらそそ原
氏ノ母^四御息所^五桐壺^六子^七衣^八と^九不^十仍^{十一}卷^{十二}名^{十三}たり
一^{十四}名^{十五}壺^{十六}方^{十七}我^{十八}祠^{十九}上^{二十}御^{二十一}前^{二十二}の^{二十三}は^{二十四}下^{二十五}人^{二十六}さ^{二十七}い^{二十八}の^{二十九}さ^{三十}り
と^{三十一}わり^{三十二}奥^{三十三}入^{三十四}リ^{三十五}云^{三十六}我^{三十七}政^{三十八}け^{三十九}巻^{四十}分^{四十一}リ^{四十二}奥^{四十三}端^{四十四}有^{四十五}桐
壺^{四十六}前^{四十七}我^{四十八}名^{四十九}是^{五十}め^{五十一}く^{五十二}す^{五十三}り^{五十四}の^{五十五}政^{五十六}是^{五十七}只^{五十八}一^{五十九}卷^{六十}二^{六十一}名
也^{六十二}桐^{六十三}壺^{六十四}ハ^{六十五}西^{六十六}京^{六十七}前^{六十八}我^{六十九}ハ^{七十}吳^{七十一}京^{七十二}アリ^{七十三}云^{七十四}
ハ^{七十五}是^{七十六}乃^{七十七}御^{七十八}付^{七十九}方^{八十}云^{八十一}延^{八十二}喜^{八十三}の^{八十四}御^{八十五}付^{八十六}と^{八十七}い^{八十八}フ^{八十九}人^{九十}と^{九十一}そ^{九十二}お^{九十三}か
ラ^{九十四}レ^{九十五}タ^{九十六}リ^{九十七}河^{九十八}原^{九十九}院^{一百}と^{一百一}云^{一百二}フ^{一百三}レ^{一百四}此^{一百五}院^{一百六}鞍^{一百七}馬^{一百八}寺^{一百九}と

小山乃来りて守とて之を以て伊勢集の娘云
つまはははと云ふあり多人と云ふ事と云ふ
多と云ふは不例歎云と云ふ事と云ふ
しる事日本記以下後孫あり

女御更衣ありては多し

延喜御門后妃ありての中更衣因子のけ服

延喜御門后妃高明の御子河原姓と云ふ事あり

桐葉帝下後孫

尚衣女院 先帝中 弘徽殿太后 二条御門后 桐葉帝

藤原女御 正法八年 藤原女御 正法八年

女御 正法八年 桐葉女御 正法八年

前尚侍 明本卷 出家

女御事

雄略天皇七年未雅姫 吉徳と云ふ 為女御は女御也

漢朝八十一女御あり 周礼の漢書より

更衣事

仁明天皇嘉祥三年正六位上純和子 不文 是初授

四位下乃更衣 桐葉天皇更衣是更衣也

とれり此の如くありたり **絶妙** **日記**

その世もははらけりやわらへん

言つ我つる事と知りて人の世もわらへ

にまのよのこみこ **毛詩云** 生芻一束其大如玉

母よりいふことありてくして入らばひひりて

さふわつる事と知りて思ひてくしてすなりとあれ

兼之桐壺を衣とて巻よ或は故衣を以て

まはした人のまはりのがにさすもけせられ

つ事といひたれは酒との出いえににすはれ

人のがいやうものたりしとてひりてこれ後

い父の遺命をかきの手とていりて今こも

うまはりてしよとまきふらわらへり一徳ふ

わらはれとてまきとるふらゆりてはふ

らふかまはしすといひてはゆりては

らかりきりてしよとわらひてはゆりては

い書月ふとてひりてはゆりては

けま衣ゆりてのゆりてはゆりては

あはれといひてはゆりてはゆりては

のうまはれいとつるべに也一云云いあやり
のあてはにたりうれふりそえてうまはれ
可いあやりまう折し句えりてふてよめがり
何んこつとてふえ
かきりてふりしり

あさあよまねる物さゆもさ病をみるうれ

吹毛末症 漢書文

わなまらささし

付と押付直耀殿如卯 安子九条在 右意はるを

竹うに流多臥中交 安子九条在 右意はるを 殿のう人の流

小かりもささるうに流小石様事とささるう

世継小わりに例とささる

ちうらう人 権源殿 婚訖といふのたしうりゆささる

後成ささるうとささる 字のささるうとささる

字のささるうとささる

入所が祢 たこのをささる上夜小房とささる

又中交ささるのりせ流利の 権源殿 の二回とさ

流房よさるうとささる元の四度のささるの二回

と上房といふ

よみせこころいふり所きくころゆされ

皇子三歳着袴例

冷泉院

天曆四年七月廿一日
東宮より

いふいと 言也

こふおといふらりたをせ川下よりいそりて
ふれれききき

差やふ何りもたすりていそりていそりて

てらるものせん 輦車

仁明天皇御弟在原得子紀伊守在位高退の之

付初ユルサ輦車卒逝之辰ユルサ納衣初贈三位

輦車ハ石をたれたれ門りののり中をいそり

のたつ中をいそり輦車より又牛車ハ牛れり

まて乗こ

いそりの約ふりて 実加

ふこころいそりていそりていそりていそりて

いそりていそりていそりていそりて

人生七歳以前ハ衣服之傷也源氏三葉より

曹長ソウチャウ衣イ服フク傾イナヒわたりていそりていそりて

祓事此所の例ふ似(う)るに仍選おし従在服
三月の事とあり

しつり責とふたふ

直とたふいさぬてまの事し夏曆小正とよ

中品の目也いゆ諸(う)しつりさりしり但百奉

まゆみか新ま(う)しつり人(う)たつりあつりのもを(う)り

しつりつりは是(う)しつり多(う)可(う)位(う)前(う)し(う)奇(う)

尚書小 黒貴新(う)人者貴(う)舊(う)問(う)し(う)る(う)

と(う)赤(う)と(う)つ(う)と(う)し(う)り(う)ふ(う) 桓(う)天(う)皇(う)年(う)安(う)徳(う)り

遷部れけ地と祐人の葬(う)り(う)定(う)ら(う)ふ(う)大(う)師(う)遺

告書云字(う)宿(う)名(う)

しつり責(う)四(う)つ(う)と(う)多(う)く(う)み(う)ぬ(う)か(う)つ(う)り(う)ゆ(う)と(う)多(う)ふ(う)

う(う)せ(う)い(う)か(う)と(う)る(う)つ(う)と(う)つ(う)ま(う)ら(う)の(う)運(う)系(う)れ(う)終(う)は(う)た(う)て

といふ(う)り(う)活(う)ん(う)と

りえ(う)お(う)て(う)ふ(う)か(う)り(う)人(う)け(う)ま(う)れ(う)ん(う)と(う)男(う)の(う)事(う)人(う)と(う)是(う)

女(う)御(う)と(う)ふ(う)い(う)せ(う)す(う)如(う)め(う)る(う)

侍(う)臣(う)女(う)御(う)女(う)御(う)の(う)例(う)あり(う)其(う)上(う)大(う)中(う)納(う)女(う)立(う)后(う)れ

例(う)たり(う)あ(う)る(う)事(う)女(う)御(う)と(う)た(う)り(う)つ(う)ん(う)た(う)は(う)れ(う)終(う)意(う)の(う)心(う)

つてをよのふりしと

わのありはよきふにりまうてを合ふり

いさくの四のわのりまうてを合ふり

常夜御魂云まうせ御ひては何事いふ言

持うさよとるを御ふは御女とて御のこの

の終り

御ふひり

御よの御ひりありまうてを御女とて御

えんまうり人まうり御

合ひてをよの御ひりまうてを御女とて御

御ふりてをよの御ひりまうてを御女とて御

御の御ひりまうてを御女とて御

御の御ひりまうてを御女とて御

御の御ひりまうてを御女とて御

御の御ひりまうてを御女とて御

御の御ひりまうてを御女とて御

御の御ひりまうてを御女とて御

御の御ひりまうてを御女とて御

しと玉のふれん

厚くすく

礼記云少而亡父者謂之孤老而亡子謂之獨老而
亡妻者謂之寡老而亡男者謂之寡以四者天
氏之窮也今日コト寡コト寡コト孤コト獨コト

月新たりたや（ひ）くみ 一言は之けり

ふんも此家重くさるるまゝえしりめさるる物り

あつこのつけ 尚侍 曲侍 掌侍 兼侍 圓健 浪遊

おにたりひて 軒 杖竹 圓健 浪遊

おのりいんてはな

おのりてありと知りてさ妙の巧のありんて

ゆしき力よるま

おしとておしと合ひわらぬ風は

おれちるおのり

おこぬるおのり 狂文云九横死わり 是中一公

横為毒薬厭 呪咀之所中 害とつり 甚障

おまいさしおのり

おろしハ停止傷 定家自承中よ

馬一とわり

まろくふ 枕意 枕多かりては寝たりはる
わけ糸のこきと云々

酒さくく一とわり 一とわり一とわり
みくわけのこきと 袷度

昔いしや敷下帯小笠とわけりては後この笠
わけのこきとも瓜皮蓋は入るに錠子

さくく一とわり 袷度 次閑

影護 初若

たいまきれふきひさし柳

傍者本末夫柳のちとをせけりや

花鳥のまきと移り

花鳥れまきと移りてはふやうのりか

とく火とわけれり

夕殿花思酒地 林焼批 末能能 長根奇

右進れつるまのゆりてはさゆいふり

子四刻丑一剋右進清室中半至卯一剋内監

亥一刻右進清室中半至卯一剋内監

亥一尅宿簡トノ井

ふかのおと 秋御殿ツト 四方有妻戸

わさゆきあそとあつしつふ

玉すま妙海おそ新ゆきあそとあつしつふ

わさここのの常あまそつり

物餉カシウ同二同し おいふ物夕供之

大正志のよもの 天子れいせの床子足 号書法

膳太床子の酒膳上右沙物夕供之 出代一也

ふかのもつりあつしつふ 是れあつしつふ

つり

かのよんおのそ 極連 かんよ 親母と云い源重

母のあそれあつしつふ 母のあつしつふ

のつりてつりてあつしつふ 母のあつしつふ

あつしつふてあつしつふ 母のあつしつふ

あつしつふてあつしつふ 母のあつしつふ

あつしつふてあつしつふ 母のあつしつふ

皇子七歳御書始例 村上天皇 親重

義平二年二月廿一日 陽後 寛和二年三月八日

ろつたつとあえの秘もを井とひり

を井とひりすハ 徹天の玉の匂

まのうらふ人よと多の法門のいつまじり

寛平遠誠云外蕃之人必可_レ在見者_レ在_レ為

中見之不可_レ並_レ對_レ耳

案之如_レ遠誠者蕃客_レ之_レ並_レ對_レ耳_レ中_レ見_レ之_レ不可_レ並_レ對_レ耳

我らうとそま中_レ小_レう_レと_レ石_レ被_レ誠_レ今

の洞_レが_レ文_レよ_レ遠_レする_レに_レあ_レふ_レ小_レ有_レ別_レ勅_レ別_レに

こつらうく_レ小_レれり_レす

鳴_レ臚_レ館_レハ_レ玄_レ蕃_レ寮_レ小_レわり_レの_レ以_レ寮_レ頭_レと_レ鳴_レ臚

と_レ号_レす_レ玄_レハ_レ遠_レ也_レ蕃_レハ_レ蕃_レ也_レ遠_レハ_レ清_レり_レ事_レ物

の客_レと_レ務_レす_レ所_レ古_レ来_レ於_レけ_レ所_レ勅_レ客_レ餞_レす_レ所

詩_レ句_レ多_レ之_レ漢_レ朝_レ鳴_レ臚_レ寺_レ如_レ此_レ多_レ也

此_レ館_レ延_レ曆_レ遷_レ都_レ之_レ始_レ東_レ西_レ大_レ玄_レ被_レ置_レ之_レ

右大弁 元明天皇和銅五年十一月辛巳加左

弁史生各六人通前十六負

漢_レ朝_レ尚_レ書_レ郎_レ親_レ近_レ之_レ官_レの_レ口_レ合_レ鷄_レ舌_レ香_レ手_レ

握蘭ニ故ニ云握蘭之職也

さう人々もろくはあましくいふことなきやうに

或託ニ云西ニまニ大ニ臣ニ行ニ幸ニ供ニ奉ニしニ妙ニいニくニ併ニ

別ニ為ニ唐ニ平ニとニいニれニ人ニとニいニてニ容ニ息ニ人ニとニすニとニ

流ニりニてニまニかニゆニつニりニ夫ニ人ニとニいニすニとニいニふニ

さうりニとニいニてニ背ニにニ苦ニ相ニあニりニおニそニくニハニ越ニ福ニ

而ニ流ニるニとニいニひニ多ニりニとニいニふニ素ニ人ニのニ詞ニもニとニいニはニ氏ニ

とニいニふニとニいニふニとニいニふニとニいニふニとニいニふニとニいニふニとニいニふニ

かニにニ云ニ成ニ西ニ文ニ和ニ書ニ經ニのニ一ニ月ニ也ニ

さうえりニとニいニふニ也ニ 女ニ使ニ 莊ニ子ニ使ニ蘇ニ也ニ幸ニにニ

博士 天平二年始置文章博士

漢書云 温故知新 謂之博士

すくえりニとニいニふニとニいニふニとニいニふニとニいニふニとニいニふニ

宿曜廿八宿九曜の約交とわん人の運命之勅

故也

源氏小町とてその名を

弘仁五年遂下明証男女都属以人初賜源氏

姓其名男皆用一字其爵女同叙從四位

弘仁源氏

源氏外除之

左大臣信 左大臣常 左大臣基 左大臣仁

右大臣多 右大臣光 右大臣和 右大臣有 天安

左大臣明 左大臣慈明 延喜 仁貞觀

天慶 仁和 寛平 源氏 仁貞仍不入之

世にていのかの交わらうすくまはり

い先帝おる光孝天皇人曲待と兼り三代の

交わらうとあり光孝と多醜醜巧人と

いりしとて 天慶 仁和 寛平 源氏 仁貞仍不入之

あらはる 花鳥合

いりしとて 仁貞仍不入之

あらはる 花鳥合

いりしとて 仁貞仍不入之

玉光 玉光 玉光 玉光 玉光 玉光

か かくひの交とてはるり

中 彰子 十二歳 入内 乃まづ也 河内 ありんか

やく 友 壺とせの 人ト名れ 業花 ゆき

十二して四常人極く

人生十二と一因と云ひて歳冠礼す初漢例也

去まの河元服有敬にてわら

宗震敬信之有後

わく申す後ののひくこれひさし

清原敬東府也 清原氏のふヶ月也

大義の老人此うす

一説云大義の理髪老人の役奉む人若こふ

としの代に理髪老人の例也

まひと雅 日本記

そころふ 養上母 桐壺帝妹之何四子服

とつては 経法大臣と云ふこれ中將とす

ふかの有原の秀一世法氏と云ふわら

能世とすく建とすり一六所の左政大臣

しすふふのわらうり一秋ひ一秋しこふり

てうりうりさりてすまをふまうり

河と死く小 河をよ死し

たひゆ 横陣 河云 在身傍 横卧 花仙素

とんあさろくれろひの 長食 下腐

さういよすそそろえ 侍殿と 親王元服

下物 儲体取倒也 殿上六間也

あくろ物への命ぬ 上の女房 手搦

かろろーりりてふたし 長階 長階 足踏

ひらりの所さきの 虎人 虎人 下 虎人 下 虎人 下

銅 銅 手 手 通 通 身 身 ハ 危 危 人 人 下 下 の の 袖 袖 底 底

あまのりひのや お 櫛 敵 敵 物 物 或 或 靴 靴 物 物

りし 桐 桐 壺 壺 念 念 殿 殿 と と

の 次 次

第二 帚木

巻末

帚木此何と云てなる所のなるやと云ふは
光原氏の名のもしくはうひけられぬ
光原氏といふ名といふは
舞下はけけてつひ常々といふ
うひくといふ常々といふ
うひくといふ常々といふ
うひくといふ常々といふ

あつたのそんねん

うられ清い

内裏河地志也けふ
丁の河地志也けふ
河地志也けふ
白紙よ去て付らる
是の物志也けふ
けふは是の物志也けふ
之の事のとて
かすたをさす

冠よすおこま い忠孝の義のあつてなりけ
孝也新のふ常おつる孝也

じつまゝの流る

もふそ何ふ人よしおま久あつてひてまふのま
つ城人のか人ばらうまて 忠人の語も也
ひんきこれ三四位 北三信也前夜事也 教信
かまふふはけられていふふはけられ

上の風化下への風刺上 詩序

上之仁に信つ風 藤原

せうん家の中れあつてとす人責 通 毛詩

國とおさうんとおつて先おとおさうあつてお
りのい先身とおさうづかぬ

とすまはうとあつてとさうと

そんまゝとすまはかりとくすまは
ひとつかこつた ころれハ勝義初也

或ハくまゝ 一致つらうまぬ

初らまのゆま 倭人日記

うまゝのまゝのまゝ

あてうりくまらりとのふあかりけり葉の葉風り
やもそわりのまらふひくせきことニせりてよき
わらうらへしきとゆひするふゆふこきとほり
けんさふ

ふいつまつくまふはけりて
まじまのうらつまらふまらゆわらふひはけりて
ふゆこらり ころらふ女の思者
ふりふあらるりて
らりすまのにらりやまら

此のうらりのうれいふたけり

親身岸頼如根系福命江頭 不操舟ツツカ

けるひゆれゆき 奇

泛舟若不操之舟 **文選**

うまのうらりていりのうらり

物定時去 け名目史術未勸他命物令判者曰奉

木のそりのくくケ 良道如制木 帝能

そてはすされまき 側付とくたえまきゆりていり

人のされまきとゆきまら物(後)後新は信言訓語

奇と云れ方とつりきねはるまゝに

下とくまふちりつれそ 下繪と云々にてく

上ふれまゝに朽本書とて是れ多きり次的事

又一致書名の事は多きり云々

ても書法はよるりていふまゝなり

すくようめい山乃市ノ末 健 兼家集

すくようめい山乃市ノ末 健 兼家集

ことと云り

いひきゆふ 言敬 といふりすれこ

詩小 看敬 愁敬 多作之

多しれまうりのてく 藤村冬洞末 十月十日 洋梅園

屋有義式を

いひきゆふ 言敬 といふりすれこ

たふまじり

かうぬまをいふる

たつていふるといふ

立同那ハ深成事 七夕ハ裁縫也

建事の古文にふかひくしてまわらぬかやうに
池のほとけをて月いふ屋を

池は月の名くまらばよき 信譽

を井をてめひくうらわ月にはか我意をて新所は
かげとくくく 屋よりハナク

わす井小屋よりハナクくくく 今ひき

くくくく 初琴上能の洞あり

初琴ハ元ハ 初琴ハ元ハ

初ハ 初ハ

初ハ 初ハ

初ハ 初ハ

初ハ 初ハ

初ハ 初ハ

初ハ 初ハ

初ハ 初ハ

初ハ 初ハ

くらきくえんじよ 古祥天女の端嚴の天女
そくきし佛春有属の事ハ法宗にほくまじり
と云しんくわーかんのまろりーと云ふ

秋やりののちりハまふとまけ

冒あ女易嫁と早輕其丈夫貧家女那嫁と映

孝於姑 文書

少ハまじりたふりうく初りのまじり

延壽武云八十行草藥女四行孝業中蒜是極

しりふふ事つろくはれりのうりつろくはれり

知者言未必 尽也 論語

三史五經 なり

三史 史記 漢書 後漢書

五經 毛詩 礼記 左傳 周易 尚書

五月五日つろれまじりたつみのあまらる

あひららはれふえりあはれとひきけ九日のこ

よまじりかまきーれいこ思うくら

聖武天皇 天保十九年五月天皇 御南苑 觀騎

村之馬 九月宴 寛平遠識曰五月廿九

月九日文人武士行事繁多不可怠不可緩

つる足 中津也 或長津 天一津也

或云初日私有方遠者次之夜不忌初日私

方遠者次之夜伴 塞旗不可看

さうも中津はさうもさうも 賢 けしと云

わがしとさうかるとさうもさうもさうも

風俗玉童哥 伴 橋在 相撲園

くこゆさこれいさふりりわけ

糸ひいさういりり 二さうふりりてゆふり

さうりり海しりり 二さうふりりてゆふり

とさうりりさうふりりさうふりり

ちさうりりさうふりりさうふりり

はまりりさうふりりさうふりり

和加伊戸の止利振毛多礼太爾半於余

変美変万世无已余世无変美以危可奈余奈

余与介无安波比危多宇加与介无安波比危

多字加与介无 催馬樂我家

まうとの後のおや 眞人の胡后より決

かとうそとひさげし

年富とまうしそぬおのうのむらそをぬれ

まうしけしと移さぬ子とつらうし

つらうしとぬれ竹の糸ふらうしと

まうしと 少と瘦

わらうしとりの力と

のらせりや

口のうらぬあとの後まわらんうらうしと

みまうしと

まうしとまうしとまうしとまうしと

まうしとまうしと

まうしの名とまうしとまうしとまうしと

まうしとまうしと

まうしとまうしとまうしとまうしと

まうしとまうしとまうしとまうしと

常本事次第違ふ小尺なり古類の同事は信
哥物云常本より本の本の毒のりふわつてその
をけりてと然くして名をいんゆわつてくしりて
いんぬと云し邪眼云信濃國の原の古を
云ふよ毒わりの毒毒よしとて名をいんゆ本
小にら本の下念のわつて立りて名をいん本
と名くすしゆんゆとららるる名をいん本
の本なり

すしゆん 正編
うきたく 真愛

并一 宣輝 卷并事

うかしのゆ強小中三の並ま日祭よ中又
名の巻の並ま祭の使菊宴りしてわり又油
木のゆ強と云や本一板なり是ふ例也凡はゆ
強小毒の板一板小同所事と名くす横堅

わろと問はるゝのこゝとわろとわろと見ゆか母と
是と堅の母と又母に居る今はうをこれ
巻これとさるゝ奥入少この母とわろと
本の次におまろの母は核堅おまゆ也未痛
死官を達生は一向核をさうかの地鉄の
ひと核とさるゝり濱松の並よかると日本と
の事と同時ふりてけりなれ核これかみ
の事言は核の事は人さ紀奥入は核の
カ御にいはりはるゝと

夕暮にたたりく月影をうき照せこゝの事
ちうちくわろとわろと 傍側 わろとわろと

うかのか核云やれたんやうか核のわり
これいふふささくわろとわろと

さうとけは 早速 いさうくわろとわろと
よのゆけさうとわろと

伊豆のゆけさうとわろとわろと
えうとわろとわろとわろと
さうの海の中はわろとわろとわろと

七の七十七七人ノ常ニ此松又百三十九ノ素
兼説

ウすうーを色けりけりて

一致人ら色せていひてはなれんかい目の人

けり次の羽は移ひまそとあり

そり色ぬら ぼりま下りに倭姫女のけりけり

うのささーはふまうりい移さう人同吹と伝せをそ

風吹と人ふいひてたかさーわけんとまよひのめと

言らう海のけり其の形をけりけりけり

まうぬのありけりけり

うのささひのけりけりまされてまのうそりてあり

いといくいはぬつれ也 を

ぬさす人ーけり 集女のまゝとありて

うりそせけりして

わすそのおんをえとらう海ようふとくはけり

いせよのわまのしがのまことや

すうのそよのわまのおまをまきまきとありてあり

又ある人々の事

花より又ある人々の事と海を知らずとくしつらふ
わさつらふ わさくしつらふ

海のうす深敷わさつらふ 船をさし人々うらふり
わらうらふりのわらわらうらうらうらうらうらうら

舟人すゆさうさく世のものとわらうらうらうらうら
うせとんふさく世のものとわらうらうらうらうら

いず 佐賀集よりわらうらうら 古今 佐賀集より
わりわさくさくさくさくさくさくさくさくさく

とくわらうら川の舟のトウと赤人さ
いたよりうらうらうらうらうらうらうらうら

はくれ兼のゆれ はくれ兼のゆれ 古今 佐賀集
こころは舟よふさく舟の舟うらうら

のさくさくさくさくさくさくさくさくさく
い例 勝中てんさく

并二 夕影

三位中将女御夕影苑、蓋の送、波の詞、研

焉

これより 竹よりうらふるまゝありの地境よおのり
実名よわたり子とわたり い地境よお名子とのすり
うらまをわたり こゝろより うらまより うらまより
まゆふちりきく 平 あけつ 孫 まゆ ゆり ゆり ゆり
作光 良 清 揚 若 介 う ま い げ 若 わ り 香

有 良 清 揚 若 介 う ま い げ 若 わ り 香
有 良 清 揚 若 介 う ま い げ 若 わ り 香
長保六正任左馬權少

うらまをわたり こゝろより うらまより うらまより

昔の内りのありき うらま うらま うらま うらま うらま うらま
うらり ま ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り
西ま左右神泉苑の良角と ま ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り
まけり ま ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り
と ま ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り ゆ り

いれくわうて

世の中いほくまうて成るん

きりきりいりあの大業舎のきりきり成るん

今伴庵の

未三之

あまのまゝひりけり 旗開尖口展愁眉 泉集

とらふ人よ

うらまふとらふ人よ

印丁六きん 聖徳太子甲斐の黒駒よ令京流て空

けりけりよ秦川勝一人は馬のけりふれきり

これかのと い面は面をこころこころいひ

世集 女道とらふとらふ人よ

いふりて筑波ふよとらふ人よ

うらまふとらふ人よ 女道可なりとらふ

後成はゆよとらふとらふ人よ

ゆらまふとらふ人よ

はきとらふ 妻とらふとらふ人よ

うらまふとらふ人よ

世集よとらふ人よ

公方て上を色しるるを方々各のびりて人々々々の元

公方てよとてとるわおん御家の

公方てハ思ひてしき波氏と申すてるるさきと

思ひてよとてとるれと云句

殿うさの丁け **作新**天云 法国外へ波の分るを

いへよのうて 或好事者募以錢帛 者後席

ろろろ 版換 先才 目今記

しりてしるる色しるるてとてとる

かゝらりり業よ

夕さき色にわらりりけふ

わきけの丁さく

既せこのあさけの姿とてとるるの多と云々するふ

あさけのひまよん

たてよまのとてとるれおれい仲りてりて然いふる

あひりりりやきとてとるり

延喜式

褶

覆袴

之部中々

結みしりぬんりりりぬ公所りりか

わけてくけよの紐きそふるよふりき小地
わりかひじきと組の紐きよきくたてけ
ふをねよ大神ららそたらしふ人ののらふ
かりそまのほまふ結我よらら及す我
ふりて今汝よららとせんとつひてあそを
かそそ之結のらよのかりぬけ下洞略し
いつきつららふらん

帝王 欽明天皇 伊予香河國孤城金書

かりまひ 農和名 農桑和名 田宅和名 日本記

こかくとつら和名しとせとらりくうやまともるす
あまのうらやま和名しとらりくうやま

かそけさき和名 伊嵩和名 金峯山和名

清少納言 花子云 われりるゆり花あそ
とけまきとらんまらささささらん今くさ
わらふよかく和名とらとらまきとらとら
うら花和名のりふまきひく和名とらとら
かそそまきとらとら和名のりつらとらとら

お願ふべきを乞ふにふれあはるべき事六十五の
月といふに遠くはたさしむるに何れも
也 猶豫と云也

たぐりく

不意

日記

卒念

日 水原より

つふくは後

河原に

みえりきり

かき中川

馬場の壱(中川)終りと云ふこと

里はあそむのやちや 宿のまゝ 旅の終り
業うとく 氣味 入るが

ひりりわりとや 夕方のうら

は音 浪氏と云わりとや 定りぬき

ちりちりふつもの合をぬき けい

よちちりしをぬき 浪氏と云

云のくちをぬき ちりよひ

ふとさしれ ちりちりふつ

と女のくちりすまて

てまじりしるにえうんてまじりしるにえうん
あまのこをこえ

いづれのよりかえんふ世にけすあまの子あまの
まじりしるにえうん

いづれをえよめとるると 病名のえとるるに
いづれをえよめとるると

あまたしむゆとるる守るるをえとるるに
あまたしむゆとるる守るるをえとるるに

いづれをえよめとるると 病名のえとるるに
いづれをえよめとるると

いづれをえよめとるると 病名のえとるるに
いづれをえよめとるると

寛平法皇与京極御息所因車返河原
歴覽山川形塔入秋月明命下御車登

一徹為御座与御息所御新内御之間
同塗以靴之戸有於御法皇令同河對云靴

以欲賜御息所は皇養云汝互生之付為下

多しとくしるふぬらんと念せせ流ておひ
けの勅宣れてさうふ糸人しるふは何とあ
そひらふすいおしり又とそ流た刀と川ぬき
てこれらふとと人せ流つりぬれはすしひてお
ころちてうしとのすもふ念まらりなり
あくろしは是とくと

梟 コノハシ 古堯反 説文云 食父母不孝鳥也

鳥鳴松桂枝 孤蔵 蘭菊 藜 蒼苔 蕙葉 地日暮 春多 施風

とらり

年ふまは我為うもとる川のうのくじまてかりふら
一秋年よりぬむはうのまらせらまらて二の膝と
りあふら中ふしうらまらせらひのまらとこれ
うらうらとくかりとら

ういじりふふとらとら

太上天皇敬重之 叙從三位及千病萬遠言
氣絶則以席 覆葬 莫特 目 掩 斂 薨 特年

けいいたあしかりりねと

世に中たれ友とふ方とてけいいたる者うらわさくあから
鳥屋の管吹

より屋のくさきりりり

山陰國風土記云南鳥部里操鳥部若秦云倭
具的餅化鳥死而居其里森云鳥部

とたてぬ念佛 万葉身後抄云喪家佛事

次中葬送以前無言念佛 下詞略之

のあかりのえん

にらそ新ゆきとあすのえんあすのえんあすのえん

すまゝの流そ山里小 任徳のこゝろのこゝろ

いゝとん

あそそととんあしあそそととんあそそととん

まきふり秋 八月九月正長秋

まきふり秋

福のあいのりあそ人あしあそあそあそあそあそ

うそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ

うそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ

たむらうのたまふつて

後撰 おま 元在のきさ ち梅のうらまきとれさう

あよゆいふれまはまよふとさうてつうさう

山室れゆひのさのきあのひくことしをまひぬさ

うりすまふふしつれ名い

うりすまふふしつれ名いさあうへにさあふあはは

は十九日おえのはれそさうし

はらひのひ龍いけしこ海はささきあつあつ

うりすまふふしつれ名い

しそ七日のほろしうりはれ三味茶は上親は面

かしま張りかうあふさかかして

肺は家々うりける付中まうりさあひげと

れうりくさうり

原さいつまはれは原まうりささあふの風がさす

あふそのおんかうりさうり種ふひさす神の種は

逢まはれはさささささささささささささささ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

わりーさうあの人のおあまさささささささ

室のふりりてやと馬ののり候はまじり
ありへの心 門前秋後枯山終日素と望
うたふりこれだけ 大峯人か書と馬心小
射揚やある心

ふれのとて下りのしすろ 新教の初て入
右に新教の心の傳 經云 新教意菩薩と

てはらとて人り多る人の
出陣の身とて立出はとて人り

近清の申持とてすろ

有原守方の任 辭左中右任 陸奥守 即日還

昇つた外例 可劫

花人よりこころのやうりえいり成り

のやうり酒とる 爵と酒こみ位より爵位の酒

いれきり 大云 上東門後の上童よい名り

すしりこきまは酒のよほとらて

竹籠 紫花 沙鉢戒經

うらまよりいさげり うらまよりいさひるる道

よきりかきまきり
まじりりり
遇

まのまじりおの原まきり
天台大師の御忌日よ
不審同

すのまきりちくよひまきり

松葉子すのまきりちく
まきり

柳のつらみまきり
三昧ハ梵語也

まきり神まきり
まきり

つらみのまきりまきり
まきり

まのまきりまきり
まきり

金輪王出まきり

法苑の久遠一現の如し

さうとく太子のくさうりり流りくる

太子の因の天星之所あり 欽明天皇は河野連太子
六葉冬十月自百濟國 經福とくそそ行の
高のてたてまつるとさ 但金剛子念珠事行
以下を亦見とさ 或人云は法隆寺よ太子の御
たりののふ念珠一連より又法隆寺のえんま
めとかりとさ

えんゆりのつたふと葉とく 貴布祿の輪

寺、法隆寺に業師仏不動なる 蓋珍の他は備
都の送り地よいた堂よ業と入ていとまつり
醫王の業よ思とせとらとく

たひゆ 向來 花伝書

とりの寺のけつとく 徳とく

ふのちとくつらんくつらん

新巴鼓 琴 琴 鳥 舞 而 鳴 魚 躍 而 狂 矣 列

ふらつとくきゆとくらん

馬のつとくふとくまのまはとく 所は地とく

いのちなるを

命はなまふくやふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく
秋のまの風よ

おまふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく
ふくふくふくふくふくふく

ふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく

ふくふく 瑞川後藤さ合ふと

ふくふく 幸色ふく幸色ふく幸色ふく幸色ふく幸色ふく

ふくふくふくふくふくふく

ふくふく ありふく事し 今案驗目し

ふくふくふくふく 古今希ふふふの神よふくふく

ふくふくふくふく 方便 持徳者

ふくふくふくふく 守井流りふくふくふくふく

ふくふくふくふく 神のふくふくふくふく

ふくふく 王氏の命也 又上右王姓よふくふく

ふくふく 屋よりふくふくふくふく

善徳のふくふくのふくふく けふふくふくふくふく

せり子を今来り見んとはよき人なりとて
御の御りたまひ 雲の下の世に
しるしをいふにせむれぬとて
多の御りたまひ

わかれうのひかりさくら
わかれ御のまじりて
つらさく

今更なるかたきけし
妹を門

猿丸右史集云ありのまじりて
とてまじりて入るる

つらさく
つらさく
つらさく

女のまじりたまひ
秋の秋のまじりたまひ
つらさく

つらさく
つらさく
つらさく

とらへてあつたことなるを、同族多隆寺ありま
ハ初巻の御名のもとに、又東洞とて秘曲あり
多隆寺、凡俗の秘事、官首のまじり東洞
とて、すまひては、まじり、ふ也、今の世に、知
あひまのまじり、まじり、まじり、まじり、まじり
純ま、まじり、秘事の服と、まじり、まじり、まじり
まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり
まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり

並 未摘花

まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり
まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり
まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり
まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり
まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり
まじり、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり

うりすまふ

うりすまふ、まじり、まじり、まじり、まじり、まじり

わんご成りののちろち福 王家を尋倫

ふそり人こく けいそり眉とひそり

ふりの友とてつまひくく

今日小窓下 自問何所為 彼能得三友 三友者為誰

翠巖能取酒 酒能取吟詩 三友遊北山 修環を

源榎中心 一福暢四支 於思中 有万 一解酒能

いま一とさの女とて 詩の事と 仔細は酒とす

とあわれまふる人へさの河の也

とていこののこいひ

とて門をさつ門のさるるそわやゆい

こののゆとつんあてのたよさあやとりさ

とてりてちるらんそそのたよさ 後と糸拂と門

たさつれ たさつれこいしとるん

とていひさるちるさけあらんあひそつあはる

喉咽進退 血泣懐抱之可新言 垂仁天皇卷

又曰樓皇 不知其所 け事 秋飲と

玉だつれつとのお

醫服と論議イフク小つりつらぬいけさふと軽文ケイブンと
と位今のイマノしり多紅のタカベニ所トコロしうらさウラサハ
弟女ニヤメよりよ者之ヨシモノに或飲シテさ女メ昔人コト者事モノし

ふ常人トコロ下シらんのノ四ヨのりリものノとトなり

香カ質シツ美ミのノ陸リク葉エフ大白象鼻オウゾウビ如ニ江蓮花カハス色イロ

あつツさサうウハハさサめメ 脈マク表ヒヤウ 脈マク裏ヒヤウ 方カタれレんンとト云イハ敷ケ

在アらラぬヌ筋シムとトつツりリ 西セ文ブン純ジュン言ゴン修シュ所ショ糸イト系ケイ糸イト糸イト糸イト

海カイ味ミ黒ク筋シムはハ衣イ也ヤ方カタれレるルさサらラとト云イハ敷ケ少シウ将ショウ入ニ

夏カのノ色シキとト云イハすスしシりリとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすス

おのノ名ナのノわワらラけケれレ

貞テイ和ワ章ショウ歳サイ寒カンとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすス

性セイのノあアらラけケれレぬヌとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすス

名ナふフらラのノ下カのノ

我ガ神カミはハらラのノ寸スン多タのノ和ワとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすス

ワワれレとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすス

幼コウ者ショウ形ケイ不フ可カ敬ケイ

老ロウ者ショウ體タイ無ム温オン

そソのノらラよヨとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすス

たタ今イマ希シをヲのノあアらラけケれレぬヌとト云イハすスはハけケれレぬヌとト云イハすス

皇列り極男と下れりか多しと人のあはし

けふふ衣よこれ 皇后 衣冠 荷信 又 皇太后代 泥信

袖さねいじんや 可なり

わが衣多のやうに 皇女の袖さねいじんや 可なり

御のうへいひうらや 可なり

表裏同衣の濃し 是より 嘉徳後

衣うれ衣をうらや

紅の衣うれ衣をうらや 可なり

来子奇しき日社んいんをさねいじんや 可なり

い者もあはしきと

い移りあはしき 猪熊お面うらや 可なり

紅の衣 火衣の面裏紅の折物 中書

いこれいひり 衣今にけをいのうらや 可なり

あひいなり 蒲陶 正月十四日 聖武天皇 天平元 始

おとこたう 男 踏寄 二月十六日 天平十四年

七月せり忠 天武天皇十年 正月七日 御向少殿宴 鏡基 唐連

檜上函ハナガハ

檜箱ハナガハ

之具足入方也

もつりくものいさゝかおそ

ふゆりまゝい

長しきおき

長しきおき

ひのめさうのつと

藤芳フジノヨシのつと

屋いり

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

第七 卷末

朱在後約年望の傍に望の字帖不更見卷中

苑安の上の望の傍に望の字帖不更見卷中

七いふと辛卯の立つ可くは 福日

桂殿近初歳 初佳媚 早年 剪花梅村下 蝶寫畫

梁邊 昔作 辛卯末 毛海波

青衣袖表袴 文小奏 蒲陶深下 重蒲陶 大海浦半

らるるのひのひのひのひのひのひのひのひ

聖主天中天 伽陵頻伽色 法華經

伽陵頻伽色印 アヤシキ 初勝 衆鳥 云 或迦樹窟式云

伽陵頻者梵語也

らるるのひのひのひのひのひのひのひのひ

玉篇云 呂大也 たりん大人所とささる也

かゝるふしと力城 初は初はけりたあつりせり

てそとくみずくともさねたさくともさくともさくとも

人の心しめて初は初はけりたあつりせり

藤壺女御立后ハ次年二月也后祠と云り凡
天曲ハ唐初の傳事ハ一人の神事と云り御
后祠とい未立后ハ後ハ又と云り也后と云

らり云々云々云々云々云々 唐ハ左高麗ハ右

云々の云々 右族ハ 又有儀

云々云々云々 孝儀御殿 樂部事

延喜十六年事云云後ハ皇五十御賀樂奉納

事保志云々云々後在大年

人種二人恒代三十六人

淨土人の云々云々云々云々

菊柿乃事ハ後云云ハの云々元良の四子の事

一云云云云云云云云云云

孝儀者原侍衛也

美代の事云々植也云々云々云々云々

榮花の流云々銀金云々云々云々云々

延喜十八年十月云々云々云々云々

正下の云々云々 正位下

中人可常了 政可家司

四ノ下ニ三月ニ至リテ此ノ下ニ不^{陰服}ルモノアリ

物忌令云祖父母父方ハ四月廿日服五月母方ハ四月

日服三月

モトモト也ト云テ此ノ下ニシテ

祭事ト云テ父方ト云フモノナリト云テ

ト云テト云フ也

ツラシクモテ 逃節 十二月廿日

除夜ニ附^トテ逃節ト云フモノナリト云テ

逃節家

又モトモト也ト云テ

源氏ト云フモノナリト云テ

源氏ト云フモノナリト云テ

ワケ^ハ家^ニモ^ト云フモノナリト云テ

ワケ^ハ家^ニモ^ト云フモノナリト云テ

ワケ^ハ家^ニモ^ト云フモノナリト云テ

ワケ^ハ家^ニモ^ト云フモノナリト云テ

かろりあへい、つきのあまのあさかたのふつはくま
まはれといわれりえよのふくはよんといふせえれ
とてひきうとふさうくうてあまのあま

平畑の鞍（たづな）柄（かざり）とよけそふらふ

かたろくせり 長保天破保書品俱世利（セリ）とあかたの契次

いづらきのの今うて 一説はあまを役人と云

えりりのえりあ 蝙蝠とて扇と化初多この

友のふゆの美者

とりの下（した）あかいあまの おおあまのあまのあまのあま

ひきとてあけりとうりあかたのあまのあまのあまのあま
としくいらとていそと

はの國のー 其事（こと）あこれ柄のあまのあまのあまのあまのあま

いづらあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

いづらあまのあまのあまのあまのあまのあま

山海の大海のまじりの血はうりやうやうのまじり
のまじりふせんくしめれつふせんまじりやまのまじり
うりまをにに良心之るうりうりまをに信ふま
かきまわりまじりくの人

い事定家やかくまうとわり親約や文章り
ふまじりくの人しかりあはれ何し程ゆくとま
可好可位郡別事白鳥文集夜園哥者宮郡

獨行九橋立婦誦泣何情切一問一雨深中池
月備問誰家婦誦泣何情切一問一雨深中池
眉竟不説

文君之事略之

郡別松叶お流るを源内約都ふとまじり
山海哥とまじりくしめれつふせんまじりやまのまじり
まじりまをにに良心之るうりうりまをに信ふま
かきまわりまじりくの人

この世を予くひりしきしとありはらそとて戸を
ちりひりつそきすせ我々人つま従ふ系巻末
全三版

くまのちりまひに我をさうらき

うへにけしよたふきさくや
まきさうらうくは我のさうらうにさうらうに
ふまうらうさうらうらんとて

経のこほの教をふきそてうよらうにさうらう人
くれつれゆきさうらうにさうらうにさうらうに
中將とて人のさうらうにさうらうにさうらうに

とありはら公かりしつらう

そらとありふ

初めのほをさうらうにさうらうにさうらうに
ゆしにうくせ中とつひあをそ

龍金後此公長終世事自今不言

とこのちりさうらうにさうらうにさうらうに

おまを此所のちりさうらうにさうらうに我をさ
ゆきさうらうにさうらうにさうらうにさうらうに
ちりさうらうにさうらうにさうらうにさうらうに

親王達とて命に口をすまふ可しと云
海内親政 右左衛門尉 三河

いふれらると思ふ事也 伊勢加茂 二葉唐草

善文の長丁糸とト多る竹皮汁とまゝにて紙の
ちぢやと云ふらるる事也

いふれらると思ふ事也

第五 花宴

い巻南殿花宴と

ささきさかりの中り 南殿 花宴 南殿 花宴

南殿 楊子木の 花宴 角あり 花宴 針りの

樹 貞観 十板と云ふ根より 花宴 前より

上 花宴 寺奉勅 花宴 是と云ふり 花宴 再感

花宴 寺 花宴 寺 花宴 寺 花宴 寺 花宴 寺

探勅 花宴 寺 花宴 寺 花宴 寺 花宴 寺

花宴 花宴 寺 花宴 寺

花宴 花宴 寺

栞脱し秋をくくさくやうくそをまゝのまといへり
そのみりのみかふ人の人なり所 栞脱者ふ一字

勅し

地下の文人可い 異音小語ゆかりを名目し
うかゆ流し吹らす文人とて是れゆかりを奉
神うかゆとて神うかり 鬘うか舞うか神也
栞脱とてふまの 鬘記云い樂章下曲の羅

門儀正侍末女初也其姿如吉祥天女常所々々
不神之而ふ賜神衣ふ述信史長例也

大に此歌の姿と云ふやうな所といふものぞれすとい
あつためをとれよををりそ風吹そよゆかりをほく
こころ人の心をふ 栞脱言つれよのの扇のさし
護祐抄まもりよらう一万葉集云南多と細夜
三にわかさうり 詠殿よ山菊人の心くみぬりうた
かりをいふりか三万よあつた 栞子巻元
かひつ月夜よはゆきめめとらうりすん
ふりしきすけりしそめ
えらりやまのうらもあふとそ 葉之波長

得るなりきまふんひそげゆつとわらせし
世よそ清きとまむいひさうわらふあつすも
てとまふまよりのすいそいふまよそまの原と
静しとまふまよりの清きとまふまよそま
りやまふまよりの清きとまふまよそま
のまふまよりの清きとまふまよそま
静しとまふまよりの清きとまふまよそま
かのもろの扇は橋の女まよそま

清かゆわ花まよそま
あふまふまよりの清きとまふまよそま
入三枚所まよりの清きとまふまよそま
うらそままよりの清きとまふまよそま
まの扇は橋の女まよそま

屋つふまふまよりの清きとまふまよそま
同まふまよりの清きとまふまよそま
のまふまよりの清きとまふまよそま
のまふまよりの清きとまふまよそま

延喜の准也、陽成光孝、宇多醍醐、自信
云元慶四年、誕生、延喜、延喜、延喜
よ所存存也、延喜、延喜
や、延喜、延喜、延喜

一、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

延喜の、延喜、延喜、延喜

かひまこと王のまへ

かこまれとのひすんけんけしよくとせ給ら
るく我のトよろろ人かやと

よろろ人かや コアラヌ 不卑 平 記

あふまこととくくくくくくくくくく

伊之加波乃じ末宇泰於此平土良礼天可良

文久の決及じ此決及二能伊可奈ぬの可奈ぬ此

常の素多の形此乃素可故多伊礼をぬ 三版可

く取可わくぬの素可故多伊礼をぬ 三版可

第六 葵

巻名

そろうく人のまをりあひの結のまをりあひの結

世中よりそはじりくつゆく

桐壺御門位とまをりあひの結

ひししししあひのまをりあひの結

く我よつまをりあひの結

我と其人とあひのまをりあひの結

前場の非文年交よのなまひ

聖德太子^{ミチノ}御^{ミコ}中^{ナカ}武^{タケ}云^{クニ}凡^ニ天^ツ皇^{ミコ}御^{ミコ}位^{イハ}者^ハ定^マ伊^イ勢^セ左^サ井^イ武^{タケ}丹^ニ王^ノ
王^{ミコ}の^{ミコ}内^{ウチ}親^{ミコ}を^{ミコ}赤^{アカ}婦^メ者^ハト^ク之^ニ着^キ之^ニ内^{ウチ}親^{ミコ}之^ノ依^ヨ
世^ヨ次^シ同^ト後^ノ女^メ王^ノト^ク之^ニ

そのは赤院^{アカノ}ありの^{ミコ}後^ノの^メ女^メ三^ミ云^{クニ}の^メ後^ノ也^{ナリ}

天^ツ皇^{ミコ}御^{ミコ}位^{イハ}者^ハ定^マ伊^イ勢^セ左^サ井^イ武^{タケ}丹^ニ王^ノ以^テ皇^{ミコ}女^メ有^リ箱^{ハコ}

内^{ウチ}親^{ミコ}王^ノ女^メ交^カ野^ノ

心^{ココロ}む^クや^クの^ミ事^{コト}神^{カミ} 日記^{ニヒギ}

より^ミ事^{コト}い^ハる^ル事^{コト}く^クそ^ノあ^ノの^ミ言^{コト}は^シり^ク事^{コト}は^シ

た^タい^タい^タの^ミ事^{コト}は^シ 神^{カミ}が^ノ者^ハ罪^{ツミ} 度^{タク}所^{トコロ}

長^{ナガ}代^{トキ}に^シた^タる^ルの^ミ事^{コト}は^シい^ハる^ル事^{コト}は^シ下^シ筋^{マシ}の^ミ事^{コト}は^シは^シり^ク

枕^{マク}草^{クサ}み^ミと^シた^タい^タい^タの^ミ事^{コト}は^シい^ハる^ル事^{コト}は^シ事^{コト}は^シは^シり^ク

の^ミ席^マ云^{クニ}事^{コト}は^シた^タい^タい^タの^ミ事^{コト}は^シい^ハる^ル事^{コト}は^シ事^{コト}は^シは^シり^ク

との^ミ事^{コト}は^シり^ク

もの^ミ下^シる^ル事^{コト}は^シり^ク 行^{ユク}秋^{アキ} 事^{コト}は^シの^ミ事^{コト}は^シり^ク

人^{ヒト}た^タい^タの^ミ事^{コト}は^シり^ク 人^{ヒト}の^ミ事^{コト}は^シり^ク 事^{コト}は^シの^ミ事^{コト}は^シり^ク

事^{コト}は^シの^ミ事^{コト}は^シり^ク 事^{コト}は^シの^ミ事^{コト}は^シり^ク

昔^{ムカシ}の^ミ事^{コト}は^シり^ク 事^{コト}は^シの^ミ事^{コト}は^シり^ク

系尚之風 必偃 論語

つふさうさく 流少納多 相多子久くす

ゆつふさうさくさうさく人のつらにうへ市女

よまのよとよそ中少ひうとさし

ちのりのりともてはかりてひくわあそ

大後云一巻院春月約年 沙興よたまあ

のそねえ 田舎世家の氏百姓もて神給

くふひくふてとわりせそあうこま

このまると定の百ん六系も体前を前ん

本のるりハ神串の傍の公に ころあ

真以本とと三枚樹とあり 天照を

あまのあやととら所く河八百方外 天照

心の極樹ととて初とひり神の縁本とす

神心本とと 本外の作意と 縁本とと

ころこのころと 曆博士 推古天皇十二年 正朔始

曆日

うさりのうのころと

たげくつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

利トクのつらさひくわる公 徳 幸イサキ

はるきうとては、お国の人々のひよはす可き
ては、友とてまうけらるる

あつて、さうりのも、以、塔、堂、友、に、也

ゆきり、あつて、勅、御、書、

目、御、取、沐、浴、事、人、生、記、沐、事、

け、た、ま、さ、あ、つ、二、月、三、日、を、と、ま、す、

死、人、の、た、ま、さ、あ、つ、す、ま、さ、

人、を、り、あ、つ、て、い、ま、ま、あ、つ、人、一、人、の、た、ま、さ、

我、ら、た、ま、さ、あ、つ、て、い、ま、ま、あ、つ、

ま、の、服、は、毒、服、り、に、濃、く、人、ま、さ、

法、家、三、昧、普、賢、大、士、法、家、三、昧、普、賢、善、薩、の、也、

あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、

あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、

あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、

あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、

凡、の、音、方、も、あ、つ、あ、つ、あ、つ、

あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、

菊のきりさきつる花はあはれあひの男あふみ

菊の松よ白きうらとては雲霧うらとてまねてつらふ

らけねあはれあひの男とけしあひのき

はあのみはらうらとて 葉のうらとてはあまふらふ

らけねあはれあひの男とけしあひのき

いづれのあまふらとてはあまふらふ

今やしえ 穢あのみとてはあまふらふ

新あのみとてはあまふらふ

正日といふ年九日の名にあらはしき

川わけてあまふらふ

中持のまふあひあのみとてはあまふらふ

先ずあまふらとてはあまふらふ

妹の服とあまふらとてはあまふらふ

是は今すまふらとてはあまふらふ

源氏のあまふらとてはあまふらふ

あまふらとてはあまふらふ

あまふらとてはあまふらふ

と後氏の如し

これやとつりやうらむ人か。今之の世に記す

いほはぬしとわり

此の月より白くはしとく神ひつるありて

かうらふと号なりとくかうらふとて

らむとて

あまのつらとつりて後とて号をよとていふをけけ

わては 紫式部 皇紀によ東の海は音ひはるか

らむとて号なりとくかうらふとて

らうれとて火さうあのみとて

忌所^{ナカ} 菅原^{ナカ} 文以^{ナカ} 紫式部^{ナカ} 凶服

とくまされらり人の 東のありのま

あふすゆとひさなりは

必^{ナカ} 有^{ナカ} 寝^{ナカ} 衣^{ナカ} 長^{ナカ} 一身有半 **新**

ののりりり丹 十月亥日作餅倉し今人

亥子餅七種粉 大直小直大直是胡不杆糖粟

いりりの船をたてたさぬにありて

美子りりいあきこ三日平餅い白まのましくいりり

五日し

福のこいりり、美りのびりり福のこいりり

あぢちよとらふくく、若月いあり

いりりいりりいりりいりり

三十一事為御秘事いさい金櫃書 文彦凡招貝

普通祝歌いりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

若のまきい福をい御濱と化して病のまきいり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

いりりいりりいりりいりりいりりいりり

あまのまらさめ西宮のまの
みりすうさむらひのよ
みれけのひささく
後架 筆
まやまのり

わうあわのりとう百年はま
わうさ年といふやう也
わうさ年といふやうに
まらさめ

第七 賢木

祇園のり此物ゆれ地をり
あまのりをりゆれつて
まらさめ

園地院河内丹波のり
りまのり

まらさめ
あまのり
あまのり

あまのり
あまのり
あまのり

舟更の解約は九月十日の事なす
いふとわがかりし事

我々の事などいふ事さしは
くろさのとり舟くら木を
うらふ事とある人として

よくあふ事とある神家の
い抄よは源氏物語の事
私云業を伴多之

舟更の解約は九月十日の事なす
の別は思ふ事ゆへ

かうさくの抄のつらさの事
い奇源氏奇と名する
所けて種はよせ奇と名する
心公といふ事とゆへ

此抄の事さしは
長奉送使天曆御舟更

長春奉還使よりきりりる人をして中納言朝忠
万代のうらうらと多と初をてと幼未ハ神をさる人
のけきくともいふに思ふ人

のけきくともいふに思ふ人 百景短平

たふさつけて心持たよと 東市御十二両安藤本御
のまの原よりとらうらうらけり

神皇正統記とてはそ非世を染のまよふらふゆえ
御まりの國津御 くまのここの地紙

まの四のりい女別あるのまよふらふ 舟の舟をの
アウカとあひらうい哥事とにそ故いあめ別の中
としこれとあふふはさる事とそわたり人
うらうらとあひらうい うらうら

の体所ののまよふのりはつらふはと又おのの
まらうらとあひらうい かこ

世継志平のまよふのり 女帝 所のの体所
かそ 所のまよふ 信とまら 信 する うらうら
し うらうら け事と

十六日二宮よまじり

玄宗末歳始遷入之付十六日今辛

樂府上高人

ワ色の四々々々々々々々

或抄云并王給櫛櫛後不徒不徒中庭直出直出郡郡

奏略之

と云々了ふとてつ常らつて車ともの

八省八省中務式部治下民下昔下相下右亮右亮

さう責めしめて西宮系并定よるは

丁川丁川の

丁川丁川を世のふれとる人のさうま

わふは町町のふ

入の日園のわをく

お坂の宮のわをく

まをまてくふわかりり

まをよりりて

孝子孝子王託云延嘉河門定河

七歳河門河門四四真信真信考河

内王上河封西之間有五ヶ所一可專
神事二者可仕は是沙事三者可安在
割四者可安在人主外一ヶ条沙忘却是
河退出し河左在ら向え

ささる池のうもこのまど経人可申す
本如法或名上りし中り多る所事
よりひまの心もふ重蔵まのりりり
中し流りし多りしせ所て在又流と
流りし多りしせ所て在又流と

池の形者このれ様しは形なり

少くはまのりりて様なり

新りの流集と名しは流六位流人

まのりり後ぬ地のまのりり 秘説有

まのりりまのりりまのりり

祢の物つがとまのりりまのりり

流りし多りしせ所て在又流と

梅屋 新元全江御殿 查新殿

しるひりのりりりりりり 子後母 秘説 史記子

依母言 平筆

可のいつれよいそじまのなまふ例おりくもわたりをれ

孫王為并院御太子内親王 文徳天皇中略 二 新 女

年ト定孫王例は一為この例りもわたりをれ

かさいふをそまろ人

ソまのちのわがたのうきまをそまろ人

はうやまのののさまろ人 世傳新

ふあひりよくらんふこのあつさよくらんふ

ち將の とれ の さ ま ろ 人

とれまののさまろ人のあつさ

いありとまあひてひとまろ人

依母言 云 り ふ そ ん 就 り の ま ろ 人

まろ人

まろ人

まろ人

史記云 甲辰怨戚夫人其子趙王因戚夫人斬

手之去眼輝耳飲瘡業 使居廟中命曰人彘

式部卿の日記が式部と多の意
旨といふ人なりといふ
う多人の事きうて然 定林院は清和朝
う然う然人といふか
あまのともさう
うらぶの事あり
中いふ事たりく
東門院中事と
一院印

定林院は清和朝の事あり
定林院は清和朝の事あり

六十巻と云ふ

本書 廿巻

末書 廿巻

義十卷
観十卷

末十卷
末十卷

文十卷
智者大師作

疏十卷
妙樂大師作

あやうき事あり人といふ
あやうき事あり人といふ
あやうき事あり人といふ
あやうき事あり人といふ
あやうき事あり人といふ

阿佛房祝

也詔西縣古師

うらきし車

服者車

ふりひひり々々々々々々々々々々

今人々々々々々々々々々々々

こころやとほれりたりたりたり

虫コラ蠅ビ貫ツラ貫ツ日ツ燕ツ太子丹ツ始皇ツとツとツとツとツ

七ツ下ツ海ツ民ツとツだツんツ方ツこツ徳ツ平ツ日ツふツ所ツはツとツ月ツ

今人々々々々々々々々々々々

才のこころに神ふ

敷るる力のこころに神ふ

玉のりくをくくくくくくくく

玉ツ壯ツ表ツ身ツ細ツ壯ツ策ツ文ツ卷ツ

たまごころに

稼ツ藪ツ及ツ葉ツ蒹ツ随ツ特ツ恭ツ敬ツ興ツ法ツ花ツ楚ツ

こころにたりく

内ツ宴ツ者ツ唐ツ太ツ宗ツ之ツ旧ツ風ツこ

暁ツ哉ツ天ツ皇ツ弘ツ仁ツ三ツ年ツ幸ツ神ツ泉ツ苑ツ隋ツ覽ツ花ツ樹ツ命ツ

文人賦詩是始也

白馬考文事

權託曰白馬同考中文統酒祿於寮左
とげさるはのすし

ふ河は也さるさるすしひの子れを我りいふ心
まの柳の糸りしこりりけとさる

岸谷迎臘 将錦 柳山意衝寒 欲放梅 椿

柳は能くしるさるを公之風はてそるよ知あし人物とき
いふかかりしあひらふふ 多ふさく柳海らま

みふりしのは 是封 太上天皇二千戸をま名千五百戸

りしのをうしそまうりけ

七十老致仕懸す所社と車

孝維注

めんやふき 掩初 古集の記字とやとそは仍字

指て勝負とさる上吉、掩初との字、石好連の

ろののののさし 階、應、蕃、薇、入、花、開

たうさことうう 高砂津 女生 未 42

多可危右の右伝左能 略下

文王の子武王の可くともらすくはるひのりん

常よりその成王の事とての所より人

我文王之子武王之弟成王之叔父之於天下亦實

さかひりあひ 二藍帯

かかひのこふふうううすえおの善文の

世をせとつる人あま

貴家ハ海不威西ま右左ハ聲ハ平秋と

位ハ所多人とて海門と傾ト不港小しと

右遷とれ海のししふしとてつる人
かこふゆり 世はあまの世はあまの

千一とつる事とて

茅八 乾花里

梅の香とつるしと何れ乾花の事とつるしと

ししとつるしと何れ乾花の事と

かこひしとつるしと何れ乾花の事と

乾花の事とつるしと何れ乾花の事と

つやまのつやまのつやま
つやまのつやまのつやま
つやまのつやまのつやま
つやまのつやまのつやま

茅丸

麻磨

えは氏 諱 居 此 浦 之 故 名 之

ののすまひしりし

光澤氏大將を御公のしりしと稱しては西の諸君
向く右東題 諱 取 之 人 配 取 の 宣 旨 小 じ り て 危
遷す今 今 の 治 女 の 名 終 小 思 せ て 竹 葉 城 介 之 親
兵 せ じ り 之 也 同 公 且 東 征 の 記 之 あり 之 風 高
の 妻 異 之 也 似 之 入 新 平 中 納 公 之 後 之 也
わんてしりしと 我 志 之 終 之 也 之 也
ワラ人さとしてにりくと
かりそりの約ひりしを思ふ今いふ終りのことそり
入道のまじりし 男女よく終す佛はの屋に入ると

人の考えん

いふの中のりては いろいろ人考の伴に
うしろひよりすくはる じきりのまじりて
字をわきまふ事

あつてはあつての強神とやうな月とわきまふ事
たふしの海とわきまふ事

文集のなれ久きふちの入りかたをいふ事

文集 白鹿 文集 一は儒道伝書 卷二 兩卷 未天 既末 為主

伊豆 伊牧 卷三

後の内なる事とてまうりておの

業流の流云師を中かきりて

いかりのあきふ中かきりて

まじりてを流してこころの

かきりて平此中細心のり

まじりてふ人かきり

りすまのりのるる

白濁の立さすくしとてうす事のおまのらるるんともあふ
しらのゆひの巻のころから

まはるころえたりり立巻れまじりきくくゆりともあふ
くしくまよきまよきあひまよん

悲中まよあよのあはままままあまよんくあひまよん
くくあまよんくくく

聖廟^{せいびやう}宰^{さい}行^{ぎやう}沙^さ下^げ他^た下^げあ^あ沙^さ精^{せい}進^{しん}七^{しち}釣^{てう}夕^{せき}

いけれぬと病後一はつりくく

いせんのあやまやまのあまのあまのあまのあまの

いげふまよまよまよまよの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
すまよまよまよまよのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

接合の行をゆきぬあまのあまのあまのあまのあまのあまの

真入云^{まひり}釣^{てう}車^{くるま}中^{ちゆう}納^{なつ}云^{いひ}奇^き可^か尋^{じん}

枕^{まくら}い^いま^まあ^あま^まあ^あま^ま

いりあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

高き所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

手校 幸則 在 幸則 共 畫士也

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

白儀の口衣小僧宗光のうらなひ也

釋迦牟尼佛、中子とありて

天也牟尼佛、中子某故命現記白佛言

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

此のよき所をくわく新しき事

うらりのまゝしき人の所りもや

歌枕 思量 降去日 我知何 寂汝明也 あつる若菜 には集

あまのそとを我とくよとせぬれ 善くしあはれもいかり

詠思為神

とよりのうらむれ 愁ふれ 若菜とらひりり ぬれよのうらむ

三思ふ邦の事 ぬれよのうらむれ ぬれよのうらむれ

ひてとよりのうらむれ ぬれよのうらむれ ぬれよのうらむれ

見日早記 今案とこよの若菜の世の心 ぬれよのうらむれ 月のふしのこころしき

月朝の鏡 雲の影 凡気如刀 不伐 詠思 集

二千里外故人心

三五夜中新月 是 心竹 自來 夫八月十五夜 禁中

独坐して 對月 元稹 小くせて 日影のるこ 今夜

あとの若菜と 思ふて げむと 補せと ぬれよのうらむれ

詠手

息賜のうらむれ ぬれよのうらむれ

去年 今秋 侍 清涼 秋憶 詩 高 独 新 賜 息 賜

御衣 今 立 以 捧 持 毎 日 拜 竹 香 天神所作

大貳ののりきりつらうくふいひく

業親ゆ流云味夏所々小ぢり所さうふの
かりの古武有國羽匠かくとまて守らげつと
あう所々まつ口子の廣業して安山海は
京の事あつたつとまらけつまつまらふ
ふれ國のあうてふふふ思のまらふまつめ
らうらせうら

いさうせんとい

しやわいのちふらうらうてあまれ流にいさうせん

しまわのちふらうらうてあまれ流にいさうせん

昔奥相島小はらうらうらうら小徳庵
の四石のしやわふらうらうらうらうら
いさうく思らうらうらうらうらうら

驛長某等河東政一落是まら

すまうらうらうらうらうらうらうら

北大林 寺 序 だんいはいらうらうらうら

四野と書てはいらうらうらうら

也相記未定

史記曰趙高款為靴思群臣不能乃先設驗
持麻厭於二世曰馬也二世嘆曰莫相謀耶謂
麻為馬問左右
らまやあがてりしん 此石の事の臣創始
あまのありのまを

故角一都家後漢文万室月常勝
たれしやふしりり
天廻去金を将軍 唯是西行不在邊 菅家代月号

可勝斗
ひまのまをそそりまを
なまをそそりまをひまのまをそそりまを
竹わらふれまをそそりまをそそりまを
五架三間新築常在階板板竹編牆 未末若編葺 下約山居

ゆりまのまをそそりまをそそりまを
けりまのまをそそりまをそそりまを

粧多紅紫二多也
乃人きのえりしもの也

源基 ~~原基~~ 梁真能源基注川流任
わすしものあきりしてういりや

或ハ海のゆへ能因多花あまのうりや
蘇りうつそえ 波羅河天馬食 噉香 楠有尸毗 桑那

服くまのうりや

醉悲泪 涙春在画裏 吟若支頤 曉燭前
宋文瀾所刊元祐小方印

相中持の對面小思うらなて通うらなし
風小わたりていづるぬへれ

故馬嘶山風 或鳥巢南枝

くまわむぞ井ふえゆいも家そくも人わらふ意ゆ
うととくやう思はるる

吳そそいづと今しりまきんあつひとれ又蘇あり
たけつれを井ふひり

たけつれを井ふひりて垂あり
尾よのれいづらふありる女の日 世風就云三月上也

枕死水ト下之何飲シ食キの肺ホ續ハ漢書シ禮儀志

云三月上巳日文人買シ禊飲シ於東流水上

世人ト云々ト有りシ其ノ方ノて 軟障

このくハいハふハひハろク人ト云々ト 道満ハ法師ト云々ト

ひハろク云々トて **皇統**云々ト云々ト云々ト云々ト

くハろク云々トて

暴風ホ卒ニ起テ屢降シ惡雨ク田王ウ暴虐ク不修シ善事ヲ 今元明經

海ノつラれル物トのりてテ云々ト云々ト云々ト云々ト

豊玉ト非ズ小トありテてテ云々ト云々ト云々ト云々ト

あり 日記

第十 明石

光源氏ト自リ治メ廣ク海ノ邊ニ居ル之ノ故也

仁王ト會ス

天曆六年三月廿七日 美被新 仁王命
はのいし

地のをこと何るよりひりひり

長和二年三月雷 少降大ぬ海

任るのころりりり

神功皇后女一年 辛丑 任者 四 神功皇后

通姫之國 基 神功皇后

ありけりりり 大八 八 の 小 の 多 の 好 く

家

尤傳云 云 卿 也 王命 云 不越境 也

か の い の あ の 新 様 集 記 巨 炊 屋 記 多古炊

え の 十 と 下 り 下 り 下 り 下 り 下

歸来倚杖自歎 息 俄頃 凡 定 雲 墨 色 杜詩

あ の の の や の か の ん

わ の の の の の の の の の の の の の の の の

う の の の の の の の の の の の の の の の の

あ の の の の の の の の の の の の の の

又幸^リの^レ道^ハ仲^リ自^ラ号^ス新^ク五^ト

人の^レ名^ヲめ^テ号^スて^レ國^トと^シて^レた^ル也

東^ニ訛^ル殷^ノ本^ノ記^曰帝^イ武^丁即^シ位^思後^與殷^而未

得^ル其^レ依^三年^不言^世事^六爰^定於^家宰^以

觀^國夙^武丁^秋爰^得聖^人名^曰說^以爰^而見

視^郡臣^百吏^比日^非也^於是^乃使^百工^營求^之

野^得說^於傳^巖中^見於^武丁^曰是^也

得^而與^之語^果聖^人奉^以為^相殷^國大^派

高^宗也

孝^經曰 不^退有^咎

ふ^レき^レゆ^レり^レう^レよ^レと^レん

ゆ^レよ^のも^のせ^きゆ^レり^レて^レ夙^の後^には^レさ^レあ^レま^の治^身

の^レう^レり^のよ^レら^レふ^レつ^レこ^レし^レき^レの^レ祿

結^ふふ^りめ^るつ^るを^以て^終れ^ば老^なる^るを^えて^死す

あ^らり^する^あま^しと^して^けり^けり

あ^らり^する^あま^しと^して^けり^けり

つ^ひよ^たら^ふと^あら^ふ人^也

わがまははるるをりすしひなふさうり
りりひて 龍 華
りのまよん^ち海はわらりま
わらりそわらりふ
わらりそ

靈位志曰 愁康宿華湯亭採琴而聞空中得善
中散曰君何不來也 答云身是古人^{ユカ} 履^{ヨク} 出^ス 教
千年矣 同君^同 源^源 以^以 吟^吟 幽^幽 曲^曲 清^清 和^和 故^故 未^未 輕^輕 而^而 就^就 終^終
所^所 數^數 不^不 宜^宜 及^及 以^以 聖^聖 子^子 授^授 之^之 作^作 曲^曲 亦^亦 不^不 出^出 常^常 唯^唯 廣^廣 陵^陵

散 絶 備 中 散 末 之 誓 不 得 教 他 人
反の世ふ初ふゆり^{ゆり}のわり^{わり}と

後系の心^心 後^後 後^後 哥^哥 系^系 の^の 喜^喜 薩^薩 の^の 事^事
入^入 道^道 ひ^ひ の^の 心^心 入^入 道^道 して

善^善 盛^盛 集^集 云^云 魏^魏 聖^聖 の^の 法^法 師^師 の^の 心^心
そのまよんを^を 入^入 道^道 して^{して} 入^入 道^道 して^{して}
入^入 道^道 して^{して} 入^入 道^道 して^{して}

まよん^{まよん} 入^入 道^道 して^{して} 入^入 道^道 して^{して}
まよん^{まよん} 入^入 道^道 して^{して} 入^入 道^道 して^{して}

右人云延喜帝命原景行公孫宗見病
目眩流の御門はさし前大主と南交武名就正貞
係と尺の事不始を言つ物流のありて一筆は
えゆの石入たりてまのまろをそののそと流氏す
ひまてえれい女のつろくさぬはをけつひま
らうとそくさむとわろふ入たわろくすしりまの
くさぬいづのこのゆらんあつて延喜御り
いさゆんといれいりそくさぬは
わ

後任し

かきまそののちりりり
わき人のつらとほ

長安偈家女嘗学琵琶於穆曾二善才年
長色衰委身為商人婦琵琶申未天江列月
馬尤遠やままきそ尋陽江上と秋中少秋琵琶
と深すとまて輝ふゆとて京都の巻わりと
感せしむ
いさゆんゆりの福と

の石の上懸置かき遠く入り入た海民小流
之よりし流ひ多し筆とてささくささ

山の祿やう 坐者

つぎのうしろ祿とさしにのささ

伊豆の海のみりれりさの三傑かた奈 下略

ひより祿のきりありあつと

早くれけきさわし此流よりなかりすくくあり

うしろ流るるんとして

くまのまといふく西の海民のまの紙

ちよよとつりりあつとん ちよよのまの紙

ほしふあかりゆるく

うしろとて若く祿つとささくささ

むしろのきり

伊豆の海民てすさくちよよのまの紙

ひよとてこれふのすくちよよのまの紙

三月十日神かりのりれ西風けき北の山

帝ミカド後ノチ差見サシミ桓帝ツツミ怒曰イカガシク京白皇后キョウハククノゴ有何罪過ナニノツミナシ而シテ枉カガム
用邪僻ヨコしま佞ニセ徒タテ絶其命ツグ勃海王ハクカイ埋ウツ既已スレバ自ミ解ツケ又マタ誅ツグ弊セ
今采后及イマニ埋ウツ自ミ誅ツグ於ニ天上帝アメノミカド震怒ツラシク罪在ツミニ雖レ赦ツグ差サシ
淺明察シカ帝既ミカド覺ツク而シテ怒ツラシク筆向ツグ於ニ羽林左監ウヰンサウケン許永コノナガ
け初上アリ時

わろりてをれり秋

周公解差書云周礼六爻一日正差二日惡差三日思

差四日寢差五日喜差六日懼差

は内言雨凡之象也直差卦解之時不明為云夢也

毛詩云東山周公東征也三年而勞歸士大夫

羨之ホム故作是詩也ホム詩略之

よろりてすくと年月 せまうりてろりろり

わろり秋めとさうり

わろり秋の月とんと下ろりてろりろり

早らり見えまろり貴入江のりけ

早らり見えまろり人むはろり入江の原もろり心月子

月入るるすれろり

梅の戸を平らにせしむるは其の功のよしん
ちひひとてしるこて

馬とちひひとてしるこて
才とけけけけけけけけけけけけけけけけけ

わすそのころえよりける仲れとひ
中乃錦の羽子の縁こ

かりれ四ささく 持取 短管取
句のくささささささささささささささささ

かすりりりりの種大ゆき
大ゆき三人 正負合 曰四人 寛平造誠と詞こ

大ゆき二人 中ゆき三人 老後八人 合十六人 誠と詞こ
公卿正負代の時と小しりて加階するこ 且大ゆき増減

事見端 仍先淑氏権大ゆき小か何せれ多るこ 毎大
子とつりおえらると数しりか大ゆき多るを

さうはうすりかの大ゆきとさうすり大ゆきと
かくさうすり大ゆきの負較小程か何せれ多るこ

かくさうすり大ゆきの負較小程か何せれ多るこ

るうふん所 秀の臣 法 倫亮

右語拾遺二のあかふけと所業部可なり

よの人とあひつゝわ 才半 七

ふり さいま宮ふささすしふふ

りしれがし 務め けふつさ

致仕大臣執政東三條院 官白例也

人の國ありけり せ中 ちのちり

漢高祖歌 易太子 呂后 忍問 而後 漢家

例多

右語拾遺二のあかふけと所業部可なり

忠仁云貞觀八年八月十九日始末 移政 辛巳

いり せつりふり 法部 事可 中

いと ねや けれと ちんけ 海和 和名 乃

あつふ ちん 祿の 日 ちん ちん 海和 乃

うしり ちん 乃

そまの 池 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

定め 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

いづれの四段井おひひくらのまけふさうつりまきか
りまきおちりりりりり 淑宗 余 相登 昭陽 余 梨
登つと東

入たまのまひら井とわたり河をささり糸はを
天皇おつりふふふ か 物 志 と 天 皇 持 統 天 皇 り
ちりちり女帝に 序 之 の 女 後 の 号 は 持 統 天 皇
の例ふふに

ひんしんし 院 司
いんしんし 院 司 兼 宗 正 院 司

たしんしんし 院 司 兼 宗 正 院 司
あけそのひりくふはる様
あけそのひりくふはる様
あけそのひりくふはる様

今いそしつらぬらるるはあけそのひりくふはる様

并一蓮生

い來中を蓮生に刊せ常階文ヲ以て蓮競チウケン
簞而生シヤクニシテ昇ノボリとるなり奇焉オモシロシ凡そ其の年の
乞とかり蓮生同事

くぬとさうほるりのひまひと竹のあはれ
しとし りのよきひ孫のねまきり

今更にはひひりん竹の子の

ちえの川のひりりと竹のあはれ

ヒナキハヒナキのあはれとてんはひひりん竹の子

とてんはひひりん竹の子のあはれとてんはひひりん竹の子

とあはれふわけをの公 福角者の名

とてんはひひりん竹の子

とてんはひひりん竹の子

唐カラ字モリ 藤ハカ姑コ村ヤト自カ 樊カ奕ヤ北キ

とてんはひひりん竹の子

養ヤウ老ラウ小コ知チりリのノ河カのノ一イチ舟フネ後ノチに

りリのノあハれレとスるル 若ニハきキりリとスるルひヒのノあハれレ

の年入幼人よりとす

きりたりとてくはひのふゆの流とてを此

ふゆの流とて道祖神のまじり禰衡のふゆ

とては流のまじりたる是途中の祈禱とて

皇帝は十余の子の中ふ宮末の子孫の流と

てて散るるまじりたるは禰衡の流とて

まじりたるは吾流の流とてまじりたるは

名とてまじりたるはまじりたるは道祖

神とてまじりたるはまじりたるは

そのまじりたるはまじりたるは

りりりりりりりりりりりりりりりりり

かみりりりりりりりりりりりりりりり

人よりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりり

ひまにふつふ

ひまにふつふひまにふつふひまにふつふ

ひまにふつふ

ひまにふつふひまにふつふひまにふつふ

ひまにふつふ

ひまにふつふひまにふつふひまにふつふ

ひまにふつふひまにふつふひまにふつふ

ひまにふつふ

ひまにふつふ

并同巻

ひまにふつふひまにふつふひまにふつふ

ひまにふつふ

ひまにふつふひまにふつふひまにふつふ

ついでに多んろう小

石守

石養天

金部 他人 建

まゝあつて

わささいふるをてふとそを招かざるけり

そりともあつて かつさうまのらと

せれらよみながらゆえ

まののふの秘封を約とあつて招かざるけり

あとの力成 禮 待禮

まのの信じん 若と送を小四方の宮と限す

物の例

開よりれささうくまう

ひらりとお飯のまらふのまて

かひのさうくまをて

進忍 日記

第十二

繪合

舟まゝに流るる御友女御は繪合之具なり

四々のこころりそりのこころかうあそ

櫛ウキミ箱

中箱

音カウ壺コ箱

ううれえ

櫛サシ櫛

公こ白しろ鳥とり

ふんの物のえさとと遠とくく着し小こ忌よ時とき冠かん指さし

可り女に房ぶ洞どう衣いとと是こ一ひと組ぐみのお也なり

銀ぎん打うち髪かみ若わか一ひと枚まいししひひううららととううとと

わわささぬぬ若わかししううららのの公こうととひひのの井いををととううらら

すりのさいくくとと 糸いと後ご五ご次じははああのの櫛くし常じょうに

互たが原はら互たが干かんけけ例れい

長なが根ね尋み

王わう昭しょう君くんりりととううのの信しん

楊やう香かう瓶びんのの馬ま嶋じま小こううののれれ 王わう昭しょう君くんのの夷い狄てい

ととううららたたとと昔むかし懐なつかししいいとと

かかののううひひのの四よ日にち記きののこことと 伊い予よのの衣いのの日にち記きり

菅すげ家か宰さい府ふ君くん事こととと念ねん記き並なら流ながとと又また後ご集しゆ時とき

時とき流なが地ちののけけ例れいとと

世説のちのあぢの竹より此のさふう下の
しげとありそ 竹反弱 五細強 う下の世説 海防之
ひ祢すとの思く竹よさく 作者云 十二折

神異録曰南方有大山長廿里晝夜火風雨不
滅火中有胤重百斤毛長三尺可為布若不
降火燒之即降号火院布也

志いんせのあり 巨勢抄覽 一説巨勢令是れ
覽同人也 但如高在福 抄覽は抄代人也
令置仁明天皇御時

ふかしのまじりて 海谷令らるる
ま紙すまじりてまじりてまじりて 虎緯こまじり
すゆり

ろくけいけいけい 夫浪風よあの中をわ國よ
あふの物 けいけいけい けいけい けいけい
まじりてまじりて 波斯國 紗の梅檀
木の下に琴と行てありふありて琴と
まじりてまじりて 龍まじりてまじりて
日中ふりて若あけらる事

ししれか人きはらうといさうりて

金^{カネ}鈕^{ニウ}細^{ホソ}金^{カネ}名^ナ其^シ半^{ハン}

糸^{イト}根^ネ青^{アヲ}何^{ナニ}

てあてのうのう 標^{ヒラ}唐^{カラ}身^ミ

女^メ子^コのううひよ 女^メ系^{ケイ}のゆ 甚^シ整^{ツル}可^カ

すうのうあき 死^シ足^{ソク}ハ札^{シラ}の足^{ソク}蔵^{クラ}の所^{シヨ}

せんうのあてはくあ 浅^{アサ}着^キ

わしひのうを死^シきくのうう人^{ヒト} 万^{マン}一^{イツ}のうう

多^タくの糸^{イト}しきうりふうひ^ヒ結^{ムス}しすひて札^{シラ}の足^{ソク}
のわしとくしそて死^シ足^{ソク}とくしそて死^シ足^{ソク}しりてううり

かてあてはらりわらてふあのをう人と

ああいたけうてうあのをあていひう

ううと

ししれのねふらうりく 石^{イシ}細^{ホソ}石^{イシ}

まかのをうさきり能^ノいあて 由^ユてうさきり能^ノいあて

さいくうう 一^{イチ}のりしさいといとあひあ

論^{ロン}語^ゴ云^{クニ} 顔^{ガン}面^{メン} 不^フ幸^{コウ}短^{タン}命^{メイ}死^シ

文集^{ブツシュウ}云^{クニ} 文^{ブン}人^{ジン}数^{スウ}年^{ネン}詩^シ人^{ジン}落^{ラク}命^{メイ}

ツんさいのさくしの 中々文文よりふつさす詩
書礼未、そのまて文のやうらん

ころろとくわくくはくらのの **花伝書**
園基出、於智慧

三人ひを流して一とつれいとも第れひとさう
海氏文々第と畫工吹、節、鼓、琴、源、琴、瑟、事

信大 澁沢中一海氏 法たてね、ゆふとん、のひ、後
久のつる、い、り、つ、さ、 畫書寮被納累代宗

而、物、在、江、沙、社、事、代、其、例、多、也

い、の、り、と、丁、之、の、代、よ、 天下の法皆自、其、舞

史記中一
五帝中紀 例始自聖代

く、の、さ、く、の、り、と、さ、あ、け、ぬ、の

今、**光**、**明**、**経**、云、獨、按、而、出、成、佛、正、見、
切、成、若、逆、而、身、退、者、天、之、道、也、**花**、**伝**、**書**

第十三 松風

おとろてひよりふきまよきくふにゆるね風を吹
ちんちんこころけけ子 寝殿の妻の看取
これわらまのりていせよ

かせも考おれいせよ新あきてとやのりなり
しりくきこれいせり中務の文

前中六王 弟の事と号小舎宮

らんふのち極まきふりたまりて

西アち極伊勢事と弟の事と二男は信上

たぐしの事と号 音 産

いふくらふつりけり

強顔 つけつけ
せつけり

らりてく 権振とくひのらるる

たぐしの事と号と 大受寺事自観十

年二月廿六日 護国院 大受寺 大受寺

在寺下多之て除之ゆき集護国院 大受寺

ちりてれこれあきゆきふ 海のきけりい

さく

大受寺
かきとらるとふかむ海はあきとくを合ふり

西の島より大なるの海女の石田にうつらねて
祀りぬりしはあそきしりて赤保の里の町に
うらまへしりてあはれて

今たあそかきしりて海はあそこの町にききし者ぬけし

東の島のまら屋の町にあそびしりてあそびしりて

新の島にうらまへしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりて

あそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

あそびしりてあそびしりてあそびしりて

恩^ツ報^レかり 隋侯^ハ玉^トとぬて 楚王^ハ破^スす 齊
王^ハ考^ラ玉^ト 光明^ノ故^ト 衣^ヲ采^テ 玉^トト^ス

り 考^ラ玉^ト 衣^ヲ采^テ 玉^トト^ス 衣^ヲ采^テ 玉^トト^ス 衣^ヲ采^テ 玉^トト^ス

天^ハよ^ク 幽^ク人^ノの^カ 一^ニ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ
天^ハよ^ク 生^ルん^ト 一^ニ 一^ニ 途^ツ 墮^ルと^シ

ひ^ハの^カ 一^ニ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ
一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ
一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

他^ハ 用^ハ 不^レ 記^ス

と^ハ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

と^ハ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ
と^ハ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

今^ハ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ
今^ハ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

今^ハ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

今^ハ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

今^ハ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

今^ハ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ
今^ハ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ 一^ニ の^カ

小井

月日の十日のひかりり 十日日 普賢 十日日 阿彌陀

晦日^{ツクシ}を 念佛常行三昧也

うらうらとせむ 心也文づく^心と作らる

うらうらとせむ 心の疾

まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}

風え^{風え}うらうらとせむ

まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}

わらわらとせむ 心也文づく^心と作らる

こころ^{こころ}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}

まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}

まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}

長神^{長神}物高^{物高} 七日^{七日}うら^{うら}連続^{連続}

うら^{うら}うら^{うら}うら^{うら}うら^{うら}うら^{うら}

うら^{うら}うら^{うら}うら^{うら}うら^{うら}うら^{うら}

東名^{東名}荒^荒云^云月^月中^中有^有河^河水^水上^上有^有桂^桂樹^樹高^高五^五葉^葉

まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}まはるる^{まはるる}

のま^{のま}ま^まま^まま^まま^まま^ま

なるふかひさうし　んその中よあひら
 のあつらひとかりしこと
 わつらひにそわらふらるふ

右方弁すきく　とつひて　は弁より源氏元服の時
 又海腰飾とてふ業人よわの所つりわりし
 人に右後の四町じりもいとまを付けわ
 しのついで神
 とのちまらめをたれと
 ちやいさうし　そわらふらるふのちの

こと清つきのの　と新りののやう　由縁余ん位
 力に邪束の人長はは西役にして邪束の勢
 むとまらせらるることありあふまふまふ
 きりく　とれはまふまふ
 その跡よりおふふふふふふふふふふふふふふふふ
 我はまふまふまふまふ　我はまふまふまふまふ
 けふのよふまふまふ　人のまふまふ
 ひののこれよふまふ
 次生垣思和に三歳而脚不立夕四年甲記

つをいつわつふあなれと号し
とこれなりとハたりまきり
あまの川えぬゆうあまのここれなりとた一よのこ
あま川をきりたりとわたり

第十卷 高き

今予家たのくうをいゆきふ神とあやまうん
いれあやうんこまうん

かりたりかりあよ位女よかうりまうりかたしこれとん
のひんこれあまのこまうんまうりたりとあまのこ
たれあまのこまうりまうりたれと女と人
てあまのこまうりあまのこまうり
いふつひてうり

いふつひてうり
あまのこまうりまうり
あまのこまうりまうり

朱衣後ハ年表才十一村と天皇ハ才十皇子と
いふまをいふあまのこまうりまうり
あまのこまうりまうり

くわしりてえをよくわすりてをせしむ
わすしりてふたりは ぼくまけ下略

ふしりてえをよくわすりてをせしむ
ゆきをわすしりてえをよくわすりてをせしむ
まのえのゆきよらんをせしむ

まのゆきりのえをよくわすりてをせしむ
せしりてえをよくわすりてをせしむ

今日陰陽寮御一人掌天文曆教凡そ氣之類

天文者日月五星廿八宿之曆教者計日月之辰教
而逸曆授特也氣色者凡そ氣色を以て五
之之色ヲ視其吉凶候十二風氣知其妖祥
應和二年七月廿日星之氣一條廣三尺許
坤貞良 席保二年正月五日白を底三尺許
經天ツ巨東西
かきりてえをよくわすりてをせしむ
道入食人
こしりてえをよくわすりてをせしむ

かゝるものありは けむるに

ひそりの山門とて風のそはれそは 後漢皇后 託上竟陽

約我國の山門とてさしりたり 高宗成王有唯雄迅風

變非有少異不失大極及成王用事人武讓

周公我胡ハ延表聖代若家ち遠下和漢先

雖不可勝計

らんうふわたりねとてさしりたり

秦始皇王世襄王のそして信即とてさしり

始皇母太后嫪毐每呂不韋とて下 各通也

五生 見其記

一世の海氏幼言小なりそはよとてさしりたり

のそはしりたり

一世海氏任友ハ反即例 光仁天皇 元正御

皇 元從五位上太子中務 光孝天皇 元正御

皇 貞觀十四年賜源氏姓 任内 武懿皇孫親王

元慶八年四月十三日賜源氏姓 元中納言從三位外太

宰師是貞中務明 上野太守盛明

四つのおちひてうの車 四つのおちひてうの
と 軽牛車に寛弘八年八月左大臣右大臣
牛車入待賢門上東山寺
せんといものうつくひとれゆれ
とるのたのひとく

ましとれりて
あつこのひよとくくこれの神をあげり
我々の人のあつこのひよとくくこれの神をあげり
此のひよとくくこれの神をあげり
一六条の体事いまいのひよとくく
ふくの女はつと

とるくまりのひよとくくこれの神をあげり
ひよとくくこれの神をあげり
りつとくくこれの神をあげり
晋石季倫居金谷美花滿物作五十里錦障
逢妻不遊樂思是心人
ふましとくくこれの神をあげり

百景才一云天皇詔内大臣右大臣左大臣競憐善心方

花之類、結山、糸之、彩河、額田王、以、秋判之、奇
新、向、不、多、事、元、以、糸、と、云、り、と、云、ん、出、め、成、と、い、ふ、
と、云、う、け、と、云、の、う、午、十、新、と、云、わ、也、

け上、喜、山、の、事、と、い、暇、之、

また、新、の、ひ、と、云、く、り、ゆ、め、の、糸、の、新、と、云、わ、
り、事、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、

新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、

新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、

新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、

新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、
新、と、い、ふ、は、け、し、る、事、な、し、

第十卷 核

八月廿七日... 九月...

本朝の治云 枕園考云 文久を以て四月

四月廿七日... 五月...

を以て核の... 六月...

拾遺集云 枕園小行の... 七月...

伊勢の... 八月...

あひまの... 九月...

村と云 枕園云 天曆八年五月...

常巻... 枕園云 天曆八年五月...

枕園云 天曆八年五月...

今案枕園... 天曆八年五月...

天曆八年五月... 枕園云...

公ね叶に

天曆八年五月... 枕園云...

後... 天曆八年五月...

妻の... 天曆八年五月...

舟の羽姿のひそりてふしてしをるゆきと津
祇ろぬすよふくまじ

いまの風のいさうかきをぬん 津のいさうかき
あつこの風

はらうの料の風まうせうりうかかんふ所の為
中戸橋の料（北風）天のいさうかきと津拂の

なまじと津の
なまじと津と津いけすうかかんふまうかきと津
なまじと津と津いさうかきと津いさうかきと津いさうかき

舟の羽姿のひそりてふしてしをるゆきと津
なまじと津と津いさうかきと津いさうかきと津いさうかき
なまじと津と津いさうかきと津いさうかきと津いさうかき

なまじと津と津いさうかきと津いさうかきと津いさうかき
なまじと津と津いさうかきと津いさうかきと津いさうかき

なまじと津と津いさうかきと津いさうかきと津いさうかき
なまじと津と津いさうかきと津いさうかきと津いさうかき

はるの海にのせらるるをいふるはるの海に
れりちりのさうりらると冬の寒の

さうておれわつた冬の月暮のたかきとさうりらり

すまうしきたりふ 清少納言 枕草子 けりし日記

あすのりらけ月つわればはゆきかると人んそ

わぶすまうし あすの月暮 とさうりらるる

とすら冬のたつと早いの月一もそ表のな

そをわげせ多く 言野筆 名 夷

一糸院 あのお まゆ あ の な い つ ら ん を ゆ れ

うら は は が 納 言 の は け り の な 事 と い は れ

あ は さ と あ わ け ら る ら る

言すりらり 名 園

一年家のいそは 名 の 心 枕 草 子 云 あ す の 中 白

の形を な つ ら う ら う ら と い は は は あ ま 事

まういれ ま を な ら う て ゆ ら う は あ の 心 は

らせ あ の な を け し は あ の 登 り し は を

あつり 中 ま あ と さ あ の 心 は な ら る

あつり あ の 心 は な ら る

六のころとるそのことりくよりなるが
ひきつけられ後升すこと 裳袴の胸のよこ
らりくしり 良く 曰く 日記 ~~日記~~

第十六 乙通女

し女あて申しお人五津世つまの友よりひいおまひ
凡げあ五節年取のより為宗十のよけ者

あわらばしりあ衣のり 陰服のり 陰服あまのり
みろきの目 舟後河解の目
あまのり先服のり 八喜言十時十二歳に
乙位よりえんことり

孫王直叙四位事上右定事し親王に五叙乙位
の儀例一世後氏右息大膳叙爵人依叶叶位位同釋
先君 伴涉伴涉志堅志堅是皆叙後五位下者也
子 六条後十時大膳右何日意乙位よりえんことり
程と抄叙に

わさきん後とよゆふ 後黄ハ六位緋袍
童後とよ返還果也

大くのみりふさうくろくハ人のツム **尚書** 大徳

古帝王必立ッ大孝小孝仕ラ卿之太子大夫元士
之嫡子十有三年好入小学見小節晋既小或晋
年十五入大学見大節晋既大或晋入小学知文
子之道長幼之序入大学知君臣之義
セオリヨウ大孝の志とて **宗新達** 志 **日** 記

宗新者 曰薄 曰マタマタキウウハのゆ流うとセオリヨウ

大孝の志とて

わさか所らる事 **礼記** 曰己冠而字之成人之道也

今案六位者其姓名と具して江二橋宣源
業十上書月三ハ喚

をツのしとせはる 敵とて

純子とて名を逃伏のしとて純子とて名を今所はる

わさきんくともあつて

とあつてとて業教の志例と純とてとて
申とあつてとてとてとてとてとて

かゝいりそのわきまをさしひきりしるるふ

儒者郷食應之儀之水原抄水原抄に桓下之玉袂桓下

あり丸桓下玉袂の心心早下早下とて是

有りたりりくまんとる人さひきりり

有りたりりりたりたりたりたりたりたり

わかれの有りたりりりりりりりりりり

わかれの有りたりりりりりりりりりり

託云有政日事并執託云有政法政法政如常如常上卿入外

託云有政掌掌唱鳴高唱鳴高

ことひきりたりたりたりたりたりたり

常り多しりりりりりりりりりりりり

揚言揚言火新火新掃掃玉玉

常り中常り中將傍將傍

みりたりりの秋のまはりの月のまはりの冬の時

かゝの四のまはりの初と儀と又つと略略

うり所うり所にけりくると又つと寛平八年十二月廿日

并并世世新新入入字字あり早初文章抄早初文章抄下下行行略略

くそこの後のうりふりりりりりりり

文章院中之東西書目抄

集 日抄

四五日のしふ史記と云文 史記 馬遷作 廿八卷

まのれうけい人そまのむじんをいふ

と案文人文章擬生擬文文章生と云文章生

擬丁ゆい擬進士下

案試作法

案頭下各一負博士以下各一負冬着試能出

貞奉文名考 以下訂お略

こをのうふへさ 論議云言可示後

所まろのむちん 瓜をうと云初考りて今

點せんそ瓜をそとけりて云云 瓜をうと云

今と擬して今の肉の試と瓜をうと云

と云一説云角筆と云と角筆と云擬を

けりて云云 瓜をうと云白擬を

出り人よ 太字案門

一人にききりて 一經云乃儒者者傳士今

者為通人也ト上カ去ス夫ス事ツの文人也能精思シ
著文ツ連ス篇章ト為鴻儒也ト今兼文人文章生ト
擬生ハ擬文章生ト云々章生擬生ト云々擬進ト
士ト

源氏ノうりつさ后トの源ノ人ト

任朱薙後沙竹陽の后ト 皇女中文姫敦康五后御女

其以依の源氏皇目上の中五沙竹右中有有江
依宣事け事新の寛弘以反事新二洞文平一
桓武ハ江天下國母多大職冠所未也志仁仁公の皇

源氏臣皆外家トト云々必執政トすカ

王女御之 朱薙院皇女累子内親王 皇女世以稱ト

王女御之 惠子女王兼書子女王兼依以多之依之

凡王女御よう々す姓ト考ハトハ計ト李部王ト

託有女御源氏女御りトわリ

か々石政后后りトわリ 木友皇子兼沙子

高市親王 皇女持統天皇皇四年任太政后ト

大將内后トりトわリ 世年以トトりトりトわリ

内后親政御堀川宮也兼 天保三年十月廿七日内覽

同十一月廿七日丙午辰中國日南唐永祚元二日
三丙午辰二年五月國白帥丙午辰何國
とくろくのたしき 古政有辰丙辰新仁授
半上年とくろく 授有辰丙辰
秋のうら風とくろく 授有辰丙辰
秋のうら風とくろく 授有辰丙辰
ひこくたぬのうら風とくろく 授有辰丙辰
うら風とくろく 授有辰丙辰
うら風とくろく 授有辰丙辰

とくろくのたしきのうら風とくろく 授有辰丙辰
丙辰入道 延喜御時三辰とくろく 授有辰丙辰
とくろくのたしきのうら風とくろく 授有辰丙辰
風の力とくろく 授有辰丙辰
丙辰のうら風とくろく 授有辰丙辰
南子期思舊賊序日隣人有改苗者發遣家
亮トメ追悲 曩昔 赴 熱之好 兼連
とくろくのたしきのうら風とくろく 授有辰丙辰
とくろくのたしきのうら風とくろく 授有辰丙辰

三とありしつゝ
の君知臣の又皇子
とさうあるべし
雄後 皇子 皇子

四門の口ありしつゝ
庸子内親王の延喜皇女村上帝の四河津御座
かへりしつゝ九条の右出れきてつゞせは
つねに歌てまゐり所々因縁を記す
母を左大臣道行等通前丹波世継云
風のよりの竹よりしらとれ 風生所秋意同臥
を井のたけとて

そのついでに
かみのついでに

大さこれ秋のさうと
くありしつゝ
ろくわすくせし
六位と冠を云ふ下
のよと冠者云

五節年五節り
同被修正し
五節年若海は天

殿と六位ヲス祿ナリシを叙し家禁文新袍之宣旨人
或加祿事と六位祿事着禁文故と西ニ書ル也
指貴王者下府人而身ニ在リ時ニ制ス臣下守ル也
代五位ト是殿六位皆用之ト也

らるる ありまゝなりと云ふ 廣勅云 巨大也
ひくみりともりともりの下と云ふ し女ハ少キと云ふ万
葉未通女ハ多ク未嫁せぬ事ト云ふ天ノ女
天の巫者ト昔トいはれしノ五節人見花散ニ奉
辰の日ハれル十一月中廿日トり始メるト云ふ

下の丑ハ但上の丑トして之節トいひ日ハなりとのハ云
辰の日ハあ節の終の節今の日ト也

あ辰下りけりともりともりの下と云ふ 善ハ抑ル也トいふ
き痛ム多クと唐ノ節の又ハ平トよク痛ムと抑ルり
と云ふ五節の初ハ節の末トいふ身ハたリりハるト云ふ

あり

ひくみり 心ハ羅ノ為ノ平 禰ハ古ノ流ト也

法ハ社ノ系ハひくみりトとハ勢ハ方トよクするト也 若ハの勢ト也
常ハきりりトとハせハ けハくハりトと 潔ハ斗ト也

かしこいしつゝこれのころ 五節前江の舟次務なり
 有り河の橋しほきこと 稱とする午後し辛務難に
 七折の江に近に橋は國司とすまる 辛務はし不稱
 かしこい平 辛務は五節より 曉天退出之時
 橋とすことと古に辛務難はさす下印（多々上出然）
 由ゆえに陸陽寮んしすりまき先（勤徳）
 印扱するさふさふと細江のむけのくさくさなり
 曰集云信濃守河野はよるく下流に河印りなる
 候し辛務のゆゑより河のあつとせし

時ちゆらうり此がまけの系の柳をさげりりり
 中々 古人大凡くしとし二葉 ~~中~~ 此の字とまじり
 ようりこまき ~~中~~ してすしと云ん
 りりり ~~中~~ 世継云ふく此の流人として
 中々 ~~中~~ ありしと云ん ~~中~~ さうく ~~中~~ 川に
 中々 ~~中~~ 汝 ~~中~~ 世継多むけり
 中々 ~~中~~ ありしと云ん ~~中~~ さうく ~~中~~ 川に
 中々 ~~中~~ ありしと云ん ~~中~~ さうく ~~中~~ 川に
 中々 ~~中~~ ありしと云ん ~~中~~ さうく ~~中~~ 川に
 中々 ~~中~~ ありしと云ん ~~中~~ さうく ~~中~~ 川に
 中々 ~~中~~ ありしと云ん ~~中~~ さうく ~~中~~ 川に

流心者、新の多ふりし、乃其のうらむるを、
と、可那の、新の、成、い、身、の、い、う、ら、う、

う、さ、の、か、し、り、成、し、ま、ひ、し、

先仁天皇寶龜六年二月七日天皇御陽梅院安
御、後、妻、於、五位、上、既、而、内、殿、妻、進、青、御、馬、
長、部、有、進、五位、上、也、若、馬、
事、舊、記、取、見、未、詳、位、字、流、言、自、以、此、御、覽、之、
流、勿、論、也、白、馬、者、引、流、後、文、也、也、本、仁、公、御、象、准、
三、后、宣、旨、御、覽、之、也、云、流、言、自、同、之、何、流、氏、右、政、

大臣曰、就、准、三、后、覽、之、者、唯、后、事、太、皇、大、后、
文、皇、大、后、文、皇、后、文、以、三、一、う、て、准、三、后、と、云、
執、政、准、三、文、の、例、本、仁、公、昭、直、公、貞、信、公、本、義、公、
子、も、多、文、の、さ、う、さ、う、さ、い、と、云、凡、流、沙、門、ハ、あ、り、文、
か、し、り、う、ら、う、し、り、あ、り、わ、ら、う、文、と、さ、さ、り、

御下、御、衣、事、面、無、通、也、裏、ハ、御、之、成、又、流、の、御、筆、
可、し、り、あ、り、去、ハ、公、以、着、御、式、ハ、朋、本、下、御、衣、深、也、
也、流、信、記、に、着、懸、塵、袍、賜、一、日、之、當、文、也、
皇、竹、之、上、念、着、赤、文、御、袍、流、又、才、一、人、同、着、之、

今より昔人と地赤て文 黻袍也

武部につまこののむのこののむよきして

延喜七年七月九日沙託曰去月廿五日或有者

卷者試判文其判及赤者三人以下行略

かくたれりの 赤 赤抄ましくはれよきしき

つらふのりふさなとらふりともきし今赤臆病

甚者と高慢つらふらふりともきしき

此より新よのりて 故武試事し

ふらふの御流すすふさの試の試ゆてひり新

のそとれてあふりすふらふ御文ゆり進士

あふれて方略の宣言ふらふ

わがとらふりあふりて つらふらふ人

安者尊 安 安人日わかさうとふのさ

ふらふゆつたれ 庭つあつてくわりのふの

たうとさくわられをこくわふのたうとさ

ひたふらりのつらふらふり 沙給年 官年辭

古字のさうとさ日 進士より沙給ひ

進士は回可進 辭 祿者也 聖武天皇 神祇始進

士誠帝王系圖追士及才例 以下約す略し

秋のつらきうしよかきうらうらしてゆげしりり

延喜二年九月文章生七年九月廿日ゆげ深傑

光代男天曆四年十二月廿日奉文章生試

同五年追及第十年正月一日ゆげ

六条京極のりりし中交のりりし家のりりし

所りりしれりせぬ

ふかのゆげし紀伊國しりの部しゆりひのりり

りりし長者吹上の濱のりりしよ面八町の内

紫極た藤た芳たらりりし批りりし木りりし杖本

して金銀場橋車保橋隈のりりしりりし

移り東陣のりりし善山面の陣のりりし六反の

りりし西の陣のりりし秋の林りりしねの林四面と

りりしりりしあまのたのりりしりりしりりし

りりしりりしねの海氏の交のりりし送て

西面八町のりりしりりしりりしりりしりりし

りりしりり

りりしりりしりりしりりしりりしりりしりりし

あるは法寺在在記に試至と云ふ事
八月九日多摩川に舟を載て 此の多摩川に河原に
撥すると記す事くあり 一世の流成所くあり

トモ河原の事

しまんのかと 馬場ウチの塚ウチ 五月の馬月十日

ひくみの此 彼岸カに二八月幸會河原に彼岸

舟食フネク

あつたのより地 葉荒ハ後面ウラ 蕨ワラビ若ワカ草クサ 蕨ワラビ草クサ

凡ソレちの流成ナリよりく 善ヨシの多タとつるのノ 好ヨクつけしシ今イマ

流成の好め事の好し 一ヒト葉ハよと流成ナリと云ふ

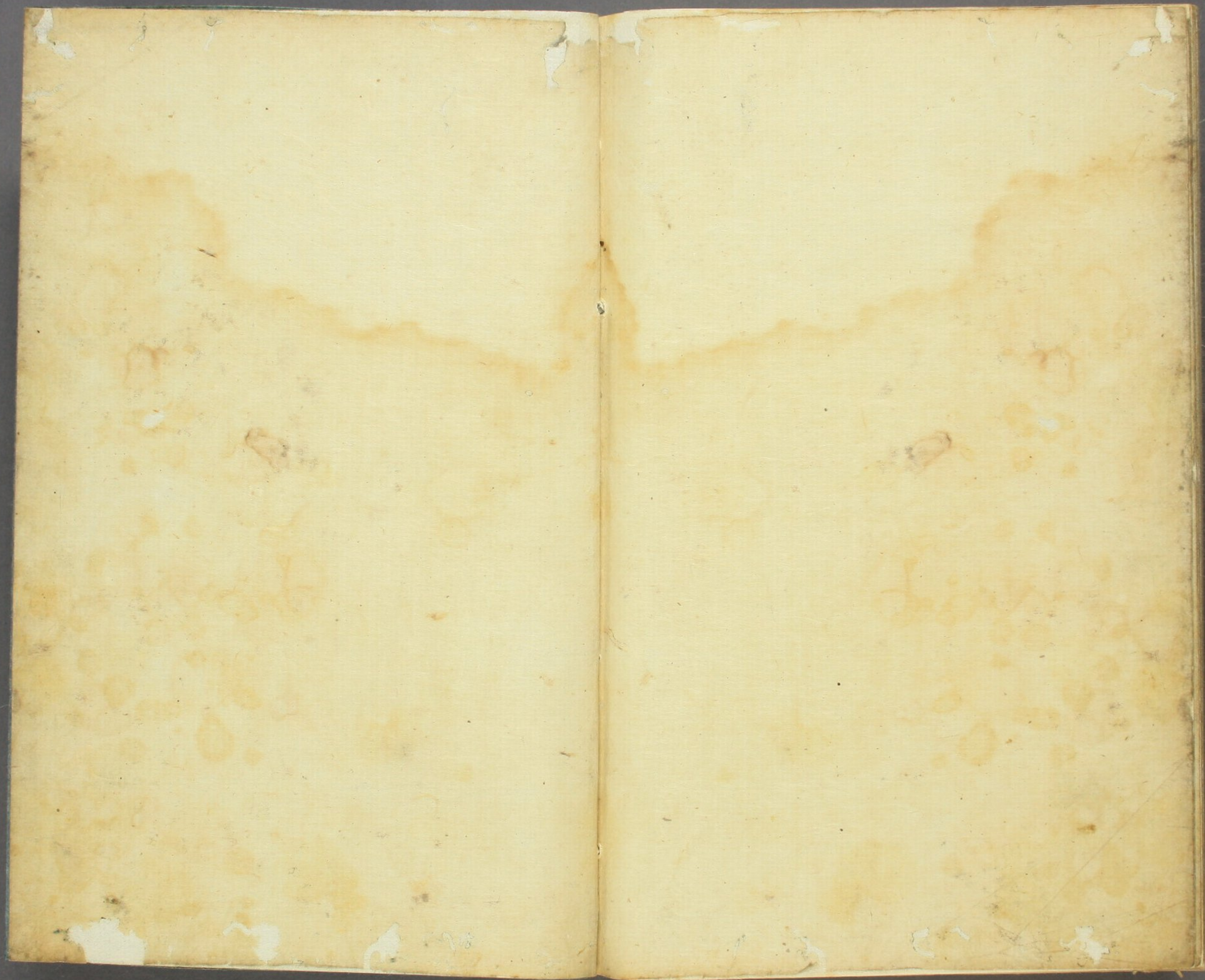
花の風情と或は岩根好と云ふ

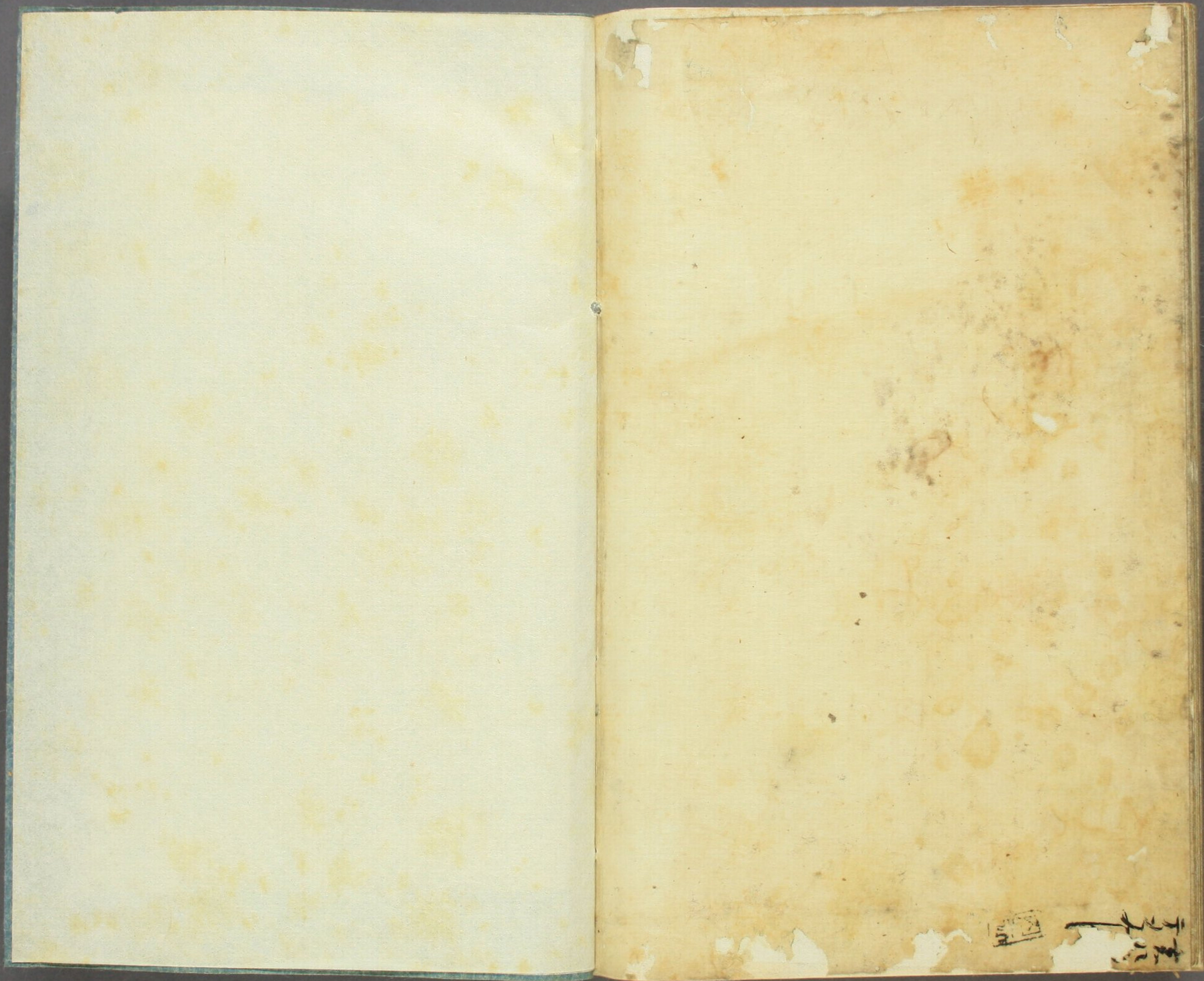
元長親王ミチノと形香カタカ及ナとひゆれヒユレに好ヨク人ヒトと云ふ

竹タケとひゆれヒユレなりナリと云ふト好ヨクと好ヨクと云ふト

つとわるといふつと云ふ

大さの好よ心ココロと云ふと好ヨクと云ふト 好ヨクと云ふト





Small red square stamp.

Handwritten characters in black ink, possibly a signature or date.

